三月、東京――。

この日はうらうらと暖かな日差しが東京全体を覆っていた。

春という言葉がぴったりな陽気。

そして、満開の桜。

ここ、ヴァルハラ政経塾も桜の花びらが舞い、あたたかな日差しが降り注いでいた。

「東京は暖かくて羨ましいのう」

ほんのり湯気の立つ紅茶のカップをゆっくりと置くと、このヴァルハラ政経塾の理事長を務める少女、ルイーゼ・アンナ・フォン・ホラントが小さなため息をついた。窓から降り注ぐ日光を浴び、実に幸せそうだ。

少女、とは言ってもその表情は大人びており、紅茶をたしなむその所作にはまるで子供っぽさはない。

「あちらはまだ寒いですか」

後ろに控(ひか)えていた長身の男が、苦笑する。

「まだ雪に覆われておる」

少女ははにかんだような苦笑を浮かべると振り返って、うなずいた。

「空港へお迎えに上がりましたときには、真冬(まふゆ)装備で驚きました」

「それくらい寒いのじゃ。そういえばお主は妾を迎えるのは初めてじゃったな。今度、我が屋敷に招待してやろう。ふふふ、驚くこと間違いなしじゃ」

「機会があれば、是非お伺いしたく存じます」

男はうやうやしく頭を下げた。

「しかし今日は天気がよくて妾は嬉しいぞ。まったく新しい門出にふさわしい陽気じゃ」

「神の祝福を感じます」

「そうじゃな」

ルイーゼは満足げに笑った。

ヴァルハラ政経塾は政界・財界に多くの人材を輩出している学び舎で、政経塾とはついているものの、その様式は高校・大学である。

この塾へは塾側からのスカウトでのみ入塾可能であり、生徒の方から受験して入ることは叶わない。選りすぐりの生徒だけが通うことのできる私塾なのである。

その理事長であるルイーゼは、このヴァルハラ政経塾が創設された明治時代から理事長を務め、その齢は一〇〇年を優に超えるという。

「理事長、そろそろ時間です」

そばにいた男がツカツカと出口に歩いて、理事長室の扉を開いた。

「うむ」

ルイーゼは上機嫌で席を立つと、窓から降り注ぐ陽気を少し名残惜しそうにしながら、理事長室を出た。

扉の外では少女の背丈もあろうかという大きな狼が二頭、少女を出迎えた。二頭とも精悍な顔つきをしており、その眼差しは鋭く、まるで人の心を見通しているようにも見えた。

「おっと……」

少女を廊下へと誘導しようとした男が一瞬たじろぐ。

「大丈夫じゃ、どちらとも人間ほどには賢い。気紛れで噛んだりはせぬ」

ルイーゼが笑いながらそう言うと、二頭は少女を守るように、その両脇についた。

二人と二頭は本部棟の長い廊下を通り、暖かな日差しが降り注ぐ回廊を歩いた。回廊に囲まれた中庭にはアカシアや菫菜など様々な花が咲き乱れ、春をこれでもかと謳歌している。遠くには桃、中央の噴水近くにはチューリップも見える。

この回廊を渡りきると、卒業式が行われる講堂へと抜けるのだ。

講堂にはフォールクヴァングなどという大仰な名前が付いているが、生徒の誰もその名で呼ぶことはない。原因は「講堂」と呼ぶ方が楽だからである。とはいえ明治期から残る荘厳なルネサンス形式の建物で、都の文化財に指定されているほどの立派な建物だ。

講堂に近づくと、中からもったいぶった音楽の演奏が聞こえ、講堂の大きな扉が開かれると、その音が一気に解放されてルイーゼたちを出迎えた。曲は、そう、ワーグナーのニュルンベルグのマイスタージンガー。

同時に講堂内にいた生徒たちが立ち上がり、ルイーゼに拍手を送る。

卒業式典、とは言ってもヴァルハラ政経塾の生徒数は全学年合わせても一二〇人程度。式の音楽を演奏しているのは、生徒ではなく雇いの楽団である。

ルイーゼは拍手に囲まれながらもったいぶった歩きで、理事長席につくと満足そうに生徒たちを眺めた。

演奏が終わると、いよいよ卒業式の始まりである。

塾長のあいさつ、卒業生たちの言葉、そして卒業証書の手渡しと式は順調に進んでいく。その間も理事長ルイーゼの出番はない。ただ奥まった一番大きくて立派な椅子に腰掛け、式を見守っているだけである。

卒業証書の授与が終わると、再びけたたましく威勢のよい音楽が演奏されはじめた。その間に教卓が片されれ、真紅の絨毯が敷かれ、奥に掲げられていた校章が取り外されると、十字架をモチーフとした紋章とこのヴァルハラ政経塾を創立した橘家の家紋が掲げられた。

そこで曲がいったん終わり、矢継ぎ早にファンファーレが鳴り響く。

すると卒業生の中から一人の生徒が歩み出て、赤い絨毯に沿って壇上へと上がり、うやうやしく跪いた。

ここで初めてルイーゼの出番となる。

「これより、賢者の義を執り行います」

司会のその言葉と共にルイーゼが椅子から立ち上がった。とはいえ、その小さな身長では荘厳さは感じられないが、しかし講堂内は静まりかえっていた。

ルイーゼは跪く一人の卒業生の前に、同じくもったいぶった動作で立つと、もう一人、このヴァルハラ政経塾の塾長がルイーゼの傍らに立った。その腕には一振りの剣が抱えられていた。典型的な西洋剣で片手で

扱うタイプのものだ。
ルイーゼはその剣の柄を掴み、鞘から引き抜くと、きらめく剣身を卒業生の右肩に当てた。そして騎士の叙任式よろしく大仰な文言をルイーゼは曰う。
「汝、我が教会と我が民、そして神に奉仕し、異教徒の暴虐と戦う全ての者の守護者となれ」
「父と御子と聖霊の名において、汝、賢者としてその資格と、権限と、義務を授ける」
ルイーゼが宣言を終えると、会場は再び静寂に包まれた。
一人一人の息遣いが聞こえてくるかのような静けさ。この静けさが何よりも神聖さを演出した。まるでルイーゼの持つ剣の剣身が光り輝く様子さえも音になって聞こえそうだった。
ルイーゼはその静寂の中で、相変わらずの大仰な動作で紫地の大きな布で剣身を覆い、その剣身の方を持って柄を卒業生へと差し出した。紫の布は厚手の生地で、そこにも十字架とそして橘家の家紋が、金であしらえてあった。
卒業生は跪いたまま剣を受け取ると、天を見上げ、ちょうど柄の辺りを胸に当てた。
恒例では剣を受け取った者は、ルイーゼより賜った祈りに対して宣誓をすることになっている。立ち上がり、剣を天に掲げ誓うのだ。そこで彼は「賢者」という存在となり、そしてこの義に出席した者は彼が賢者となった証人となるのである。
その剣先を天に向かって掲げるところまでは、確かに予定通りだった。しかし次の瞬間、卒業生が何かを叫んだ。その言葉が日本語ではないというのは誰しもが解ったが、その意味が解った者は……おそらくルイーゼだけだったかもしれない。
卒業生の叫びと同時に真っ黒な閃光が一瞬講堂内を駆け巡る。このブラインドネスの光によって、講堂内にいた大半の人間が失明した。

「バカな!?」
第一声をあげたのは、ルイーゼだった。
その言葉を言い終わらないうちに、すでに剣の切っ先はルイーゼの元へ届いていた。
左胸、いや心臓をわずかに逸れ、左腕の根本近くを剣が貫き通していたのだ。肩甲骨がまるで紙のように破れてつき通され、ルイーゼの身体を貫通している。
だが、ルイーゼの身体から吹き出すその血は、黒く濁っていた。
ルイーゼの後ろに控えていた二頭の狼が卒業生に向かって飛びかかろうとしていたが、何故かルイーゼは右手で二頭の動きを抑制した。
「貴様…」
そして自分に剣を突き立てた相手を睨みあげる。
しかし相手はかまいもせず剣を引き抜き、次の一撃を振り下ろそうとした。
「残念じゃ……」
だがそれよりもルイーゼの方が速かった。右腕を掲げたかと思うと、その手の軌跡に二〇もの光が出現し、それらが一気に彼に向かって行った。
左腕が吹き飛び、足、腹が粉砕され、最後、その頭もが吹き飛ばされようとした瞬間、彼の姿が剣もろとも消え去った。
「な…!」
行き場を失った光弾はそのまま講堂の壁を撃ち抜く。
ここで初めて、ルイーゼは敵が卒業生の彼ではないことに気付いた。そう、今までに味わったことのないこの痛みも。これはただの剣による傷ではない。忌まわしき不浄の力。
薄れ行く意識のなかで、ルイーゼは自分に付き添っていた男の姿がないことに気付いた。
「くっ……」
最後の力を振り絞って、ルイーゼは何かの呪文を唱えようとしたが、貫かれた傷故に左腕を動かすことが

できなかった。神経までぶっつりと切られてしまっていたようだった。結局、呪文を完成させることができず、ルイーゼの意識もまた途切れた。

倒れるルイーゼを狼たちが支えようと駆け寄ったが、ルイーゼの肩口からあふれる血の飛沫に触れて、慌てて立ち止まった。

ルイーゼがそのまま床に倒れる。

失明を免れた数人がルイーゼに駆け寄ろうとする。それを狼が体当たりして阻止しようとしたが、一番ルイーゼの近くにいた塾長がルイーゼを抱きかかえてしまった。

「はっ……ぐっ……!!」

ルイーゼの血を浴びたその場所が一瞬で腐り、骨が露出したかと思うと、その骨もぼろぼろと崩れていく。

ほぼ瞬時にして彼の半身が腐り落ち、その場で内臓を垂れ流しながら絶命した。

周囲は光を失った者達のうめき声、わめき声。

外へ飛び出す者、嘔吐する者、気を失う者など多数。気が触れてしまった者も少なくない。

うららかな春の陽気にふさわしくない、嵐のような出来事であった。

東京守護神

Characters

天野光人

熾天使と人間のハーフ。東大生で神保町に探偵事務所を開いている。
長いこと人として生かされていたため、天使としての自覚はまだ薄い。やすらとは幼馴染み。

朝日奈やすら

天野光人の恋人であり幼馴染み。この地上に取り残された天使であり、光人や瑠璃火より早く覚醒し、人類と何らかの協力関係を築いているようである。現在は警察官。

橘瑠璃火

長きにわたり封印されていた天使。ほんの数年前に封印を解かれ、政治の世界に請われてルイーゼの側近となる。
上品で清楚だが正義感が強すぎる嫌い有り。

二階堂静香

光人の高校時代の同級生。光人と同じ東大に通う。
いつも女装していて、冷静なんだけどニコニコしている底の解らない存在。都知事の秘書見習いとして都内を駆け回っている。

ルイーゼ

ヴァルハラ政経塾理事。明治時代から財界の中枢に存在していたらしい。多くは謎に包まれているが、その正体は魔法使いのようである。賢者。

小池百合子

第20代東京都知事。
通訳・ニュースキャスター出身。中東情勢に明るく、国際派の政治家だった。自ら党を旗揚げし、東京都の新しい形を模索している。

葉室耀

東大法学部教授で、西洋法制史が専門。若くして教授に上り詰めた。周囲からはかなり変人扱いされている。
光人を休みなど関係なく呼び出してはこき使う。

高木翔吾

ヴァルハラ政経塾の事務員。財務官僚出身のやり手だったが、早々に官僚から民間に出てヴァルハラ政経塾へ。ルイーゼ暗殺未遂事件以降、行方不明になっている。

土屋敬之

知事の第一秘書。コテコテの保守で知事とは意見を戦わせることも多い。政治家とは思えぬガッチリとした体つきをしており、とても60代には見えない。賢者。

一、影響

昼の東京大学の学食といえば安くて量も多いと有名で、大学生のみならず周辺のサラリーマンなどで賑わう。メニューによっては争奪戦になったり、席も確保するのが難しいほどの人気ぶりだ。

それでも学生たちは慣れたもので、手際よく自分のトレーを手に取ってテーブル席へと歩いて行く。

それに今は春休み中であり、学生よりも社会人の方が多いように見える。

『昨日起きましたヴァルハラ政経塾での傷害事件の続報です。続々と被害が明らかになっています』

そんな中、長テーブルの一角でスマートフォンの動画ニュースを見ながらラーメンを啜っている学生がいた。いや、まぁ、そんな学生は珍しくもないのではあるが……特徴的なのはその銀色の髪だろうか。

誰と話すでもなく、ただ黙って東大名物の赤門ラーメンを食べている。

彼が見ているスマートフォンには、昨日のヴァルハラ政経塾での事件を取り上げるニュースが映っていた。

「おはよう、光人君」

そこへ一人の学生が、人が埋まっているテーブルとテーブルの間をぬってやってくると、声をかけてきた。

「よう、二階堂」

光人と呼ばれた学生は顔をもたげると、少し意外といった表情を浮かべた。

「春休みなのに、わざわざ本郷までお昼を食べに来たのか？」

光人はそう言いながら、スマートフォンの位置をずらして青年が持って来たトレーを置けるようにスペースを空けた。

「光人君に会うためなら、本郷まで来ることなんて全然苦(く)じゃないよ」

ニコニコと笑いながら二階堂と呼ばれた学生が隣の席に座った。

「その言い方は、誤解を招きそうだからヤメロ」

光人は遠慮なくイヤそうな顔をした。

「ひどいなぁ。だいたい光人君だって、春休みじゃないか、どうしてここにいるんだい？」

二階堂が本当に悲しそうな表情をするものだから、この二人はデキているのではないかと特に女子学生には噂になっていたりするらしい。

どちらもビジュアルはキレイというか端正な方だから、余計にそう思われてしまうのだろう。

光人は一八〇センチの身長に銀髪、透き通った瞳に肌は女性のそれのように白くてムラがない。一方の二階堂もスラリとした身体にサラサラの髪、そして整った目鼻立ち。二人が並んでいると、確かに絵になるかもしれない。

「ちょっとマテ、二階堂！ こっちに散らすなよ？」

光人は二階堂が置いたトレーを見ると、逃げるように上半身を仰け反らせた。

今日の光人の服装は、白のワイシャツだ。そして二階堂の注文したメニューはカレーうどんだったのだ。

「ボクがそんな不器用だと思う？」

二階堂が任せろと言わんばかりに胸を張る。

「念のためだ、念のため」

光人はそう言ういいながらも、ではカレーうどんを持って来た二階堂の服装はどうなのかと視線を送った。

二階堂は春にふさわしい鶯(うぐいす)色の薄手のロングスカートにフリルの付いた清楚なブラウスだった。カレーうどんが散ったら困る服装とかいう以前に、どう見ても

着ている服は女物なのである。
だから余計にこの二人が一緒に居ると、女学生たちの関心を買ってしまうのだ。
もっとも二階堂の女装は今に始まったことではないのだが……まさか東大に受かってまでその女装スタイルを守り通すとは、もう慣れたはずなのに、光人は彼に会うたびに驚くのだった。
「ヴァルハラ政経塾のニュースかい？」
一方の二階堂は光人のことなどお構いなく、光人のスマートフォンをのぞき込んできた。
「ん？ あぁ、今朝からこのニュースばっかりだ」
「そりゃ名門校な上に特殊な学校だからね。財界や政界に卒業生はたくさんいるし、塾自体はわりと謎に包まれているしで、報道する側も熱が入るってものさ」
「名門校ねぇ……」
「言うなれば早稲田とか慶応の学長が殺されそうになるみたいな大事件だよ」
「なるほどな、そう言われればこんなに報道されるのも、納得がいくか」
「あら、なんか素っ気ない」
「ん？ あ、いや、ちょっと大袈裟だなと思って……」
「大袈裟？」
そう、光人には大袈裟なことだと思っていた。なぜならヴァルハラ政経塾の理事長がどんな人間かを知っているからだ。
「お前だって知ってるだろ？ あの理事長がそう簡単に死なないことくらい」
「確かに彼女の齢（よわい）は一〇〇をとっくに越えてるらしいね。だから、その辺も含めても報道が過熱してるんじゃないかな？ ヴァルハラ政経塾は結構謎に包まれている学校だと思うな」
「ふむ」
あの理事長には不思議がたくさんある。今まで取り沙汰されなかったのがおかしいくらいに。

「理事長は無事だったみたいだけど、死人は結構出たみたいだね」
「理事長以外は普通の人間だからな……」
「ふーん」
「なんだよ？」
「なんか理事長の秘密を知ってそうな口ぶりだなと思って」
「まぁな」
「え、ほんとに⁉」
「残念だが、その秘密を知ったからと言って、誰でも理事長みたいになれるわけじゃないぜ？ あの理事長だからできることなんだ。誰にでも出来ることだったら、秘密にしてたって他の誰かが見つける。そうだろ？」
「そんなもんかな……」
「もしそうだったら、人間はとっくに寿命を克服してるはずさ」
光人はそう言うと、最後に残っていた麺を平らげた。赤門ラーメンは汁なしラーメンなので、これでドンブリが空っぽになった。
「見つけてもさ、隠してる人はいるかもよ？」
青年は少し意地悪そうな笑みを浮かべると、そう答えた。その瞳は自信ありげだ。
「ハハ、もちろん、そういう奴もいるかもな」
光人も同意する。
そう、いるのだ。それも光人は知っている。
「なんだい、その反応？ 心アタリがありそうな感じじゃないか」
「あっても、俺は何も言わないぞ」
「ケチ」
「ケチで結構」
「あ、また死者が増えたみたいだよ？」
二階堂が不意に光人のスマートフォンを指さした。死者数を示していたテロップが、二つ増えて六人になった。

「おかしいな……」
思わず光人からそんな言葉が漏れていた。
そもそもからしてあの理事長が事件を未然に防げなかったことがおかしい。また、防げなかったとしても、ここまでの死者を出してしまったことがおかしい。
「なんだか、深刻そうな表情だね」
「あの理事長がその場にいたにしては、被害が大きすぎると思ってね。犯人は……卒業生なのか」
「逃走してるみたいだ」
「逃がすとか、ほんとにらしくない」
「フフ、なんだかんだで、このニュースが気になってるみたいじゃない？」
「う……確かに」
「理事長のことが心配とか？ それともヴァルハラ政経塾に知り合いでもいるのかい？」
「んー……実は東大を受ける前にスカウトされたことがあるのさ」
「え!? ヴァルハラ政経塾にかい？」
「ああ……」
光人が通っていた高校は進学校で、東大進学者も多い学校だった。そして彼は模範生であったし生徒会長なんかもやっていたので、教師からも非常に目立つ存在だったのだ。
「凄いじゃないか！ いや、光人君なら当然なのかもしれないけど。いや、それよりも」
「？」
「ボクは初耳だよ。同じ高校に通っていたのに、どうして教えてくれなかったんだい？ 悲しいなぁ」
「端(はな)から行く気がなかったからな。俺にとっては他人に言うことじゃなかったんだ」
「それにしても、ヴァルハラ政経塾を蹴るなんて……」
「東大に入ってるんだから、文句を言われる筋合いはないぞ」

さすがにヴァルハラ政経塾と東大を比較されたら、知名度は東大の方が上である。

光人はどうして自分がスカウトされたのか、その理由を知ってはいたが、ここでは話さないでおいた。

「それはそうだけど、あ、でも待って？」

「俺が気になる理由も解っただろ？」

「そっか、もし入学してたら、この事件に巻き込まれてたんだね」

二階堂はポンと手を打って、確かめるようにもう一度スマートフォンに映し出されるニュース映像へ視線を送った。

「なんだか運命的なものを感じるね」

「はは、確かにそう考えてしまうかもね」

「だってそうじゃないか、まるで事件が起きることが解っていたみたいだ」

「ただの偶然だよ」

「うう～ん、でもやっぱり運命的なものを感じてしまうなぁ」

二階堂は感心しきりだが、実は光人が気になっているのはそこではなかった。

この事件、自分がヴァルハラ政経塾に入学していれば防げたかもしれないと思ったのだ。だとしたら、理事長には少し悪いことをしたな、というのが光人の本音だったのだ。

しかしそれも光人は二階堂に伝えることはなかった。話しても何だかイヤミになるだけな気がしたからだ。

「ところでだ」

「ん？ なんだい、光人君」

「別に俺と飯が食べたくて本郷に来たわけじゃないだろう？」

「ははは、実はちょっと都知事に呼ばれてしまってね。ついでだから光人君がいるかもしれないと思って寄ってみたのさ」

「ああ、そっちか……」

二階堂はその若さで都知事の秘書の見習いのようなことをしている。いったいどういうツテがあったのか不思議ではあるが、優秀な人材を確保するという意味では、まだ政治的にも染まりが浅く入学間もない東大生を囲っておくことは重要だと光人は思った。

こう言うのも青田刈りとでも言うのだろうか？

「人使いが荒い人だってのは認めるよ。でも彼女は一生懸命なんだ。彼女自身もプライベートを犠牲にして職を全うしている」

「支持率も高いみたいだしな。メディアではパフォーマーとか劇場型とか揶揄する声も多いみたいだけど」

「解りやすい演出は必要だからね。こと政治は色んなベールに包まれていて、一つの問題を片付けるにも、一つのことをやれば解決するなんてことはない。けど、関係する全てを説明しようとすると、都民はめんどうがって聞いてくれない」

「つまり、都民が関心を持ってくれて、効果が一発で解るようにしているわけか」

「そんなところかな。だからメディアで採り上げられる問題だけじゃなく、裏では様々な問題に取り組んでいるんだ」

「問題は数え切れないほどありそうだしな」

「そうなんだよ、利権構造が複雑に絡み合っていて、梃子でも動かない人たちが多いんだ。何重ものベールに包まれているし、それら一つ一つを丁寧に解体してやらないといけない。気の遠くなる話だよ」

「んー……」

それに関してはどうなんだろうと光人は思った。

別に今までの利権構造を壊しても、今の都知事による新しい利権構造が築かれるだけで、本質は何も変わらないんじゃないかと光人は思った。

だが、それは光人の心の中にしまっておいた。

それよりも光人が興味深かったのは、この二階堂静香という青年は自分よりもクールな人間だったのだ

が、都知事のこととなるとやたら熱く語ることだった。それほど都知事に惚れ込んでいるらしい。
珍しいことだし、良いことだと思った。
「やりがいって言うのかな、久しぶりに燃えてるよ」
爽やかな笑顔で二階堂はそう言った。
「いいことじゃないか」
光人も彼の情熱を祝福する。
「でね、ここは一つ光人君にも手伝ってもらおうかなぁって思ってるんだけど……」
「……」
しまった、その情熱がこっちにも向けられるとは。
光人は内心を隠さず、苦笑した。
「そんなイヤそうな顔しないで」
「ま、長い付き合いだ。俺に出来ることならやるよ」
せっかくの二階堂の情熱を削ぐのは友人のやることではないと光人は思った。それに自分もいつかは政治の世界に……入る気は毛頭ないが、利用されるということは何となく感じている。
「感謝するよ、光人君」
二階堂は満足そうな笑みを浮かべた。

＊　＊　＊

事件翌日のヴァルハラ政経塾は、当然のことながら閉鎖されていた。
周囲には厳重な警察の警備が付き、中はまばらではあるが、捜査員や鑑識が出入りしているのが見える。
事件の起きた講堂『フォールクヴァング』は校門からは見える位置にないため、ブルーシートは見えない。
そこへ一台のパトカーが、新たに入ってきた。
そのまま本部棟へと続く並木道を通り、車寄せで停まると、本部棟からわらわらと捜査員が出てきて、到着した人物を出迎えた。
パトカーから降り立ったのは、赤い髪が印象的な女

性だった。いや、まだあどけなさが残る、少女と言っても良かった。

ただその表情はあまり機嫌が良さそうではない。

「はじめまして、公安六課の朝日奈(あさひな)よ。要請通り、今からこの現場は公安六課が受け持つことになったわ」

彼女はわりと早口であいさつをしながら、警察手帳を開いて見せた。

手帳には警視正などとなっているものだから、出迎えた捜査員たちが慌てて襟を正すが、彼女は右手をナイナイと横に振った。

「あー、そんなのいいからいいから。あたしの場合、便宜上の階級だから気にしないで」

そう言いながらさっさと手帳をしまった。

だいたい本当に警視正だったら今頃デスクの上でふんぞり返って、現場になんか来たりしないつーの、などと心の中で愚痴りながらも、彼女は捜査資料を受け取った。

とは言え、それは急ごしらえのもので、A四コピー用紙にパラパラとまばらに字が躍っているだけだった。

ま、そらそうでしょうねとも思う。昨日の今日で大した資料が用意できるわけもない。

事件から一日たって、ルイーゼ暗殺事件は公安部第六課に所轄が移った。

第六課は簡単に言えば、超自然的な事象に対応する部署である。刑事部ではなく公安部なのは、そういったものが大規模に利用される場合、国家転覆や組織犯罪が多かったという歴史があるからである(特に宗教団体など)。

したがって、個人レベルの超常現象にアレコレと首を突っ込んできたりはしない。

「朝日奈警視正一人だけでありますか?」

資料の説明をしていた捜査員がふとそんなことを聞いてくる。

「今んところはね。ウチは慢性的な人手不足なのっ

て……」

ここで一息ついて、周囲を見渡してから、「ま、どこも人手不足だとは思うけど」と付け足した。

とはいえ、警視正までもが現場に出てくるとか、それはとても人手不足であろうという印象を与えてしまったかもしれない。

当のボスはデスクの上でふんぞり返ってますよっと。

朝日奈は心の中で、そう訂正した。

「鑑識はあとから来るから」

言い訳するように朝日奈は答えると、捜査員に案内され、事件の現場となった講堂、フォールクヴァングへと足を踏み入れた。

事件が起きたあとは救急隊員と根津署の連中しか入っていない。

「うえ……」

この建物に近づくにつれて感じていた嫌な気は、中に入ると一層強くなった。

手元の資料によると、鑑識と救急隊員が一名ずつ亡くなっていた。

ルイーゼの血に触れたのであろうことはすぐに解った。壇上には赤黒い液体が、コールタールのようにこびりついているからだ。そこから今でも瘴気が立ち上っている。

朝日奈はすぐにでもこの瘴気を浄化したいと思ったが、ここから力の源へたどれることもあるので、ぐっと我慢した。

「警視正、あの引き継ぎは……」

一緒に居た根津署の捜査員が恐る恐る尋ねてくる。

よく見ればどの捜査員も帰りたそうだ。まぁ、得体の知れない案件だから仕方がないといえば仕方がない。そもそも普通の人間では取り扱えない事件なのだから。

「あ、ごめん、いいわ、あとはこっちでやるから」

引継書にサインをして渡すと、捜査員は胸をなで下ろした。

「あ、でも警備の連中は置いていってね」
朝日奈は意地悪そうな笑みを浮かべると、去り際の捜査員の背中にそう声をかけた。
それから朝日奈はルイーゼの血糊(ちのり)がべっとりと着いているそばで微動だにしない一頭の狼に近づいた。ルイーゼの飼っている……いや、正確に言えばルイーゼの側近である狼は二頭いると朝日奈は聞いていた。
名前はゲリとフレキだということは知っているが、いま目の前にいるのがどちらなのかは朝日奈には解らなかった。
「えーと……」
朝日奈は狼の前に来ると、狼の目線にあわせて屈み、ヴァイキング式の挨拶をしてみせたが、狼からは鼻で笑われ、それは婚礼の時にやるものだし不幸が起きた場所でするものではないと返された。
あちゃー、ファースト コンタクト失敗かと朝日奈は思いながらも、改めて警察手帳を見せるが同じく狼は鼻で笑った。
「人に合わせる必要はない。お前の本当の姿は、見えている」
彼はそう言うと、改まって頭を垂れ、朝日奈へは服従の意思を表した。
朝日奈はホッとすると、まずは先程から耐えられない欲望を狼にぶつけた。
「さ、さわっていい？」
「……」
狼は朝日奈のそのよだれを垂らしそうな表情から、彼女の意図を察知すると、呆れたような顔をしつつも、朝日奈の前で身体を伏せた。
「ありがとー！」
朝日奈は目を輝かせて狼に触れた。
朝日奈の手が覆い隠されるほどのフカフカの毛。
「わー！ わー！」
頭に首元、あごの下、背中と朝日奈は霧中になって

狼を撫でた。
その白銀の毛は、神々しくもあり、優しくもあり、なんとも不思議な感触だった。
「どこが気持ちいいの？ ここ？ ここ？」
非常事態だというのに、なんなんだと思いながらも狼は気持ち良いところを撫でられると、その場所を朝日奈にすり寄せた。
「へー、犬とあんまり変わらないのね」
という言葉に、狼はますます呆れるばかりだった。
「あー、気持ちよかった！」
ひとしきり狼をなで回した朝日奈は満足そうだ。
いま目の前にいるのはフレキだと言うことも解った。
片割れのゲリはルイーゼと共にいるという。
狼はルイーゼを守り切れなかったことに、少しショックを受けており、また犯人への報復を口にした。
「気持ちはわかるけど、報復はダメよ。今は二一世紀。剣の時代じゃないの」
「……」
狼は不満そうだったが、口答えはしなかった。
「課長！ 朝日奈課長！」
そこへ、後ろからドタドタと数名が駆け寄ってくる音が響いてきた。
振り返ると同じ公安第六課の面々だった。
「来たわね」
朝日奈は集まってきた面々をざっと眺めると、テキパキと指示を出した。
ルイーゼの血の調査。
他、魔法などの痕跡の調査。
敷地内の証拠品捜し。
敷地外の証拠品捜し。
これらは当然、科学的な調査だけでなく、魔的な調査も行われる。
とはいえ魔に関する知識と能力を持っている人間は、公安六課の中でも限られている。しかしそれらの能力

がない捜査員でも、どういう調査をすればよいのかは解っているので、普通の警察官や鑑識がやるよりはだんぜん効率的である。

「ルイーゼと被害者の所へは？」

「四人向かわせてます」

「あとは検視か……」

「遺体は確保してありますが、検視できるのは明日以降かと」

「まぁそれは仕方ないわね」

やすらは下唇を噛んだ。

今回の事件の被害者を検視するには、確実に魔の力がいる。しかし魔の力が使える捜査員は、今、やすらの目の前で現場の調査をしている。今日は現場検証だけで終わるだろう。

いや、もしかしたら明日も現場検証しなければならないかもしれない。

「これだけ派手にやらかしたら、犯人はすぐに解りそうなもんだけどね」

朝日奈はため息交じりにつぶやく。

「解っても捕まえられる相手だといいんですけどね」

部下の一人がぼそりと答えた。

「あー、まぁそうね……」

捕まえるの、あたしなんだろうなー、と朝日奈は嫌そうな表情をした。

犯人が魔を扱える以上、逮捕は容易ではないし、普通の人間ではムリである。こちら側も魔に熟達した者が必要となる。

「あーもー、ほんっと人手不足！」

朝日奈がぷくーっとほっぺを膨らませると、八つ当たりのようにフレキの頭をぐしゃぐしゃと撫でた。

「あんたにも協力してもらうわよ！ 魔が使えるんだから!!」

そして顔をギュッと両手で押さえると、その澄んだ瞳を見つめる。

フレキはフンッと鼻で笑うと、「当然だ」と返した。

＊　＊　＊

「イラッシャイマセ、天野(あまの)探偵事務所ヘヨウコソ！ ゴ用件ヲコチラカラ入カイタダキマスト、折リ返シゴ連絡イタシマス。デハ、ゴ用件ヲドウゾ……イラッシャイマセ……」

いつもの抑揚のないロボットの声。

天野光人の家は神田にある今にも倒れそうな古民家だった。一階はカフェになっているが、出ている看板は『天野探偵事務所』である。

「ただいま、レディ」

人感センサーによって何度も同じ言葉を繰り返すロボットの頭をポンポンと叩くと、光人は開店準備を始める。と言っても開店するのは探偵事務所ではなく、カフェである。

この古民家はカフェとして使えるように改造されているのだ。

居間と食堂をぶち抜き、一つの広いフロアにしてあるし、キッチン沿いにはカウンター席を設けてある。畳張りだった居間はフローリングに敷きなおした。

庭に面する広縁はオープンテラスのようにしてあり、荒れ放題だった庭はきちんと手入れされ、今や様々な花が咲き誇っていた。

光人はロボットを片付け、庭に面している戸を全て開け放った。

時間は一七時。これから日付が変わるまで、ひっそりとカフェを営業するのだ。

古民家を再利用した、和洋と新旧が織り混ざった独特な雰囲気の喫茶店。最近流行のリノベーションというやつだ。

しかし神田は喫茶店の激戦区であり、しかもこの店は神保町を貫く靖国(やすくに)通りからは少し奥まったところに

あるため、開店しても客がすぐに来るわけではない。それに一七時開店とあっては、ほとんどのサラリーマンたちは仕事を終えており、どちらかというと飲み屋が繁盛する時間帯である。

なので光人は店を開けると、ただのんびりとテラス席で新聞を読んだり、キッチンで新しいメニューを考えてみたり、接客ロボットに依頼が入ってないか調べたりして、穏やかな時間を過ごす。

この接客ロボットは某ゲーム会社が受付用に使っていたもので、捨てるというので知人のツテでもらってきた物だった。自分が大学に行っている間に依頼者が訪れたとき、最低限の御用聞きができるように改造したものである。

探偵事務所を構えたところで客なんてそう来ない。それならば普段は喫茶店でもやってればいいかという安易な発想の元、この天野探偵事務所はあるのだった。

『んー…』

光人はスマートフォンで留守番ロボットのメモリにアクセスした。留守中に依頼が来たかどうかをチェックするのである。

残念なことに天野探偵事務所は小学校の通学路に面しているため、放課後に子供達のイタズラが入っていることも少なくない。

それらを流し見しながら次々とデータを送っていく。

だが、今日も依頼らしいデータは一件も入っていなかった。

『やれやれ』

光人はため息を一つつくと、厨房に移ってメニューの下ごしらえを始めた。どうせ客はそう来ない。開店してから下ごしらえをしても間に合うし、ここは喫茶店であるから凝ったメニューがあるわけでもない。

食材を刻みながらも料理の新しいアイデアを思いつくと、本来の下ごしらえの手を止めて別の料理を作り始めてしまう。シェフの気紛れナントカというメ

ニューがあるが、この喫茶店は気紛れメニューしかないと言ってもいいだろう。
それでも夕食時になると、ちらほらとお客さんが訪れはじめた。
この時間帯に来る客は、今のところ東大生と地元の商店を営む人たちだ。
ただこの店は開店して間もないので、彼らを常連と呼ぶのは早い。
二一時も過ぎると、また違った客層で席が埋まる。
この店は酒は出さないが、〆(シメ)のメニューと酔い覚ましのハーブティーの種類が豊富で、それが少しずつ評判になっているのだ。〆のメニューは素麺や蕎麦などを使ったシンプルであっさりとした料理が取りそろえてあり、ハーブはお客から気分や体調をきいてから、最適なものを勧めるといったこだわりだ。
そのため、一杯やったあとのサラリーマンやＯＬが立ち寄るようになった。

「やぁ」
二三時をまわった頃、二階堂が店に入ってきた。
少し疲れた顔をしている。
「テーブル席、あいてるからどうぞ」
この時間ともなると新規のお客さんももう来ないだろうと判断した光人は、二階堂を一番奥のテーブル席へと案内した。
「ありがとう。コーヒーと、いつものを頼むよ」
二階堂はホッとすると、用意された椅子に腰掛けた。
いつものと言うのは、ボンゴレだった。コーヒーは普通にアメリカン。
交わした言葉は、それだけだった。
これは光人の方針で、店側の人間が常連客や顔見知りの客と会話していると、他のお客さんが疎外感を感じるからだった。だから学友が尋ねてきても、気軽に対応はするものの、話し込んだり騒いだりはしない。
二階堂の方も、普通の客と同じようにする。

しかし、そこはただでは黙っていない二階堂静香だった。彼は料理を待つ間、LINE で光人に今日来た用件を伝える。

もちろん光人は料理に忙しいので、すぐに返事は返って来なかった。が、伝えておくことが大事なのだ。

二階堂は一通り入力し終えると、改めて一息ついて、リラックスした。

「おまちどうさま」

ほどなくしてボンゴレとホットコーヒーがテーブルに置かれた。

オリーブオイルのいい匂いが食欲をかきたてる。

「ありがとう」

満面の笑みで二階堂が礼を言う。どうやら疲れがだいぶ和らいだようだった。

「食後にハーブティでも作ろうか？ 都知事のところから今戻ってきたんだろう？」

「いいね、それも頼むよ」

「わかった」

厨房に引っ込んだ光人は自分の端末にメッセージが来ていたことに気付いた。開けば、いまフロアでボンゴレに舌鼓を打っている二階堂からだった。まぁ、こんな時間にわざわざ店を訪ねるということは、何か用があるんだろうと、光人も薄々感じていた。

そしてそれが昼食の時に話題に出た、都知事関連の話なんだろうなとも予想する。

「ん……」

案の定、明日の夕方頃、都知事と会えないかという内容だった。

話が急過ぎはしないだろうか？

光人は、まず、そう思った。

『ずいぶん急だな。俺に何を期待してるんだ？』

そう送ると、人手が足りないんだという返事だった。ビラ配り、支持者の対応、講演会の列整理や会場の準備、片付けなどと返ってきた。

その返事を見て光人は少しホッとした。何か秘書らしい、責任のあることをさせられるのではないかと、内心ビビっていたのだ。

ちょうど明日は定休日だ。

「解ったよ」

光人はそうとだけ返信すると、他の卓にいる客たちの食器を片付けにフロアへと戻った。このカフェの閉店時間は〇時。もうすぐ客たちも退店するだろう。

食器類を片しつつも閉店の準備も進めていく。そういえば自分たちの夕食も作らなければなどとも思う。余っている食材を頭の中で思い浮かべながら、二人分のメニューを考える。

そう二人分。

光人が二階堂を残して最後の客を見送った時だった。来客を知らせるカウベルの音が響いた。

「ただいまぁっとぉ……」

同時に疲れたようなちょっと低めのトーン。ため息が混じっている。

店に入ってきたのは、朝日奈やすらだった。

「あー、重た…」

彼女はカフェのテーブル席の一つに座りながら上着を脱ぐと、肩にしてあったホルスターを外してテーブルの上に無造作に置いた。その動作は少し緩慢で雑だ。よほど疲れているのだろう。

ゴトリと言う重い金属物が木製のテーブルに置かれる音が店内に響いた。

ホルスターには Sig Sauer 320 が二丁納められている。朝日奈やすらの愛銃である。

「お、おいおい、そんな物騒なモノを客の出入りするスペースに置くなよ!」

光人は慌てて注意する。

「あ、ごめん……もー肩凝っちゃってさー」

そう言いながら、やすらは次から次へとマガジンを出してはテーブルの上にゴトゴトと並べる。全然光人

の言うことなんか聞いていないし、そもそもそれらのマガジンは一体何処にしまってあったのか？
しかも空になったマガジンも混じっているものだから、物騒感が余計に増す。
「まぁそれだけ持ってたら、肩も凝るだろうな」
光人は呆れながらも、入れ立ての紅茶をぐったりと座っているやすらの前に置いた。アッサムの強めの香りがすうっと立ち上って、疲れた彼女を包み込んだ。目もさめるし、頭もシャキッとする香りだ。
「夕食の準備は済んでるよ」
光人はそう言って笑顔を手向けた。
「ありがとー、今のですっごい癒やされた！ お腹もペコペコー」
朝日奈はニコーと笑って、ちょっとだらしないけれども幸せそうな表情をする。
コーヒーを出さなかったのは、やすらの胃が空っぽなのを考慮してのことだった。
「紅茶を飲んだらその物騒なモノを片付けて着替えてこい」
「はーい」
やすらは素直に返事をすると、肩にホルスターをひっかけ、両腕にマガジンをいっぱい抱えて上機嫌で階段を上っていった。やすらが歩くたびに、金属が触れ合うガシャガシャという音が響く。なんともはや、本当に物騒な音だ。
光人は呆れながら、しかしやすらの東京での立場と活躍を考えれば、仕方ないと思いつつ、夕食の準備にとりかかった。
この二人は幼馴染みであり、恋人同士であった。
やすらは警察幹部への道に進み、光人は大学生となり、探偵事務所を開いた。警察官と探偵、なんともはや、絶妙でもあり奇妙でもあるコンビだった。
「彼女、お疲れのようだね。挨拶をするのをためらってしまったよ」

ボンゴレを食べ終わった二階堂が、光人とやすらのやりとりを見ていたのだろう。バツが悪そうに笑った。
「アイツのいる部署は特殊だからな、いつも人出不足みたいだ」
「ふ～ん、幹部候補なんだっけ？ 若いウチからそんなに働きづめだと、ちょっと心配しちゃうな」
「そうだな……俺もいつあいつが爆発するか気が気じゃない」
「え、そっちなの？」
「ん？」
「鬱になっちゃうとか、仕事辞めちゃうとかそっちをボクは心配したんだけどな」
「マジか！ そうなったら収入がなくなるから困るな」
「ちょ、ちょっと光人君！」
「冗談だよ。あまりにも目に余るようだったら、やめさせるつもりだよ。あいつを必要としている場所は、他にもあるしな」
「そんな引く手あまたなのかい？ すごいなぁ、とても同い年には見えないよ……」
「おまえだって一人前に政治家の秘書になれてるじゃないか」
「それは言いすぎだよ、光人君。見習いだし、まだまだこれからさ」
そう言って二階堂は謙遜するが、その笑みは自信ありげだった。
「なるほどな」
「それじゃぁ、ボクもおいとまするとするかな。もう閉店時間を過ぎてしまったしね」
「ん？ あぁ……」
「どうもごちそうさまでした」
「お粗末様」
「明日、よろしく頼むよ、光人君」
二階堂の信頼しきった表情。
「はいはい」

光人はすこし苦笑しながらも、友人を見送った。

＊　＊　＊

厨房で自分たちの食事の準備をすませ、テーブル席に持って行くと、そこにはすでにフォークを握って幸せそうに夕食を待つやすらの姿があった。スタンバイOK、食う気満々である。

ここで「晩御飯はありません」と言ったらどんな顔をするだろうと、光人は内心そんなことを思った。

「ありきたりのメニューだけど」

光人はそう言いながら、余った食材で作ったパスタとスープ、そしてサラダをやすらの前に置いた。それと鶏肉が余ったので、ハーブを使ったグリル料理も。

「光人が作ったものなら、毎日同じメニューだって美味しいわよ！」

にぱぁと笑うやすらだが、実は彼女の舌がまだまだ未熟なのを光人は解っていた。だからやすらは何を出されても美味しいとしか言わない、というか言えない。

とはいえ、そんなやすらの味覚を成長させるのも光人の役目かもしれない。

「ヴァルハラ政経塾の件に回されたか？」

光人はサラダを取り分けながら、そんな話を振る。

警察内部ではあの事件がどういう扱いになっているのか、興味はある。

「まーねー」

「どうだった？」

「どうもこうも……派手にやったわねーって感じ？」

「暗殺の目的は？」

「それはまだ解んないわ。でもヴァルハラ政経塾側はあたしたちより情報はつかんでるだろうから、黒幕までは結構すぐにたどり着けるんじゃないかしら」

「おいおい、それは警察の仕事じゃないのかよ」

「賢者が絡むとねー、そもそも警察はあんまり関わり

たがらないの」
「でも、そのための公安六課だろ？」
「そ、あくまでも公安ね。公安。賢者同士が何しようが知ったこっちゃないわ。ただそれが社会の秩序を乱すなら、注意くらいはするかな」
「注意かよ」
そんなことでいいんだろうかと、光人は呆れた。
「それよりも大変なのはこれからよ、これから！」
「これから？」
「ヴァルハラ政経塾側は絶対報復に出るはずよ」
「……」
光人はさらに呆れてしまった。賢者たろう者が報復などばからしい……。賢者とは人を超越した、言わば人類の模範になるべき存在だ。そんな彼らが報復などと言う幼稚な行動に出るとは。
そこから生まれるものは、報復だけである。
だいたい、ヴァルハラ政経塾が報復なんかしたら、それは私刑だろう。完全に違法行為だ。
「もちろん報復は秘密裏に行われるとは思うんだけどー……」
しかし目の前の少女は報復がさも当然のことのように話を続けた。
「仕掛けた方もヴァルハラ政経塾の報復は想定してるって言うか、たぶん報復される準備も整ってる。じゃなきゃあのルイーゼを暗殺しようなんて行動は起こさないと思うの」
「野蛮だな……」
「つまり、どっちかが降参するまでやり合う可能性が高いわ。しかもヴァルハラ政経塾側は大々的にやられてる。メンツ丸つぶれってヤツ？ 仕掛けた方がどんな連中なのか、まだ解らないけど……これから人がいっぱい死ぬでしょうね」
「マジか……」
「今回だってルイーゼは死を免れたようだけど、生徒

や教師に死亡者が出ている上に、後遺症が残った人たちもたくさんいるわ」
「後遺症？」
「うん、犯人はね、最初に失明させる力を使ったの。ほとんどの生徒はこれで目をやられてる」
やすらの知るブラインドネスの魔法は、普通の人なら九五％が失明する。
「じゃぁ、ルイーゼを暗殺する所を見た者はいないってことなのか？」
「ブラインドネスに耐えた生徒や教師はいたわ。それに使われたブラインドネスも、恒久的なものではない事も解ってるの」
「でも後遺症が出たんだろ？」
「うん、たぶん精神的なものね。ほとんどの生徒が回復してるんだけど、回復しない生徒もいて、医者の話では精神的なショックでそのまま失明してしまったみたい。だからそれが解ければ、視力も回復するかもしれないって」
「なるほどな」
「それに、視力が回復してもＰＴＳＤになったりしている人もいるかも……」
漆黒の光、無残な塾長の死体、壇上にこびりついた赤黒く呪われたルイーゼの血、そしてむせ返るような血と内臓の臭い……視力を奪われていたからこそ、余計に恐ろしく感じたことだろう。
「ヴァルハラ政経塾は多くの有能な生徒を失ったことになるな」
それもまた、犯人の目的の一つなのかもしれないと光人は思った。
「あと、ルイーゼが狙われたことが、実はものすごく問題なの」
「ほう？」
「ルイーゼって表舞台じゃそんなに有名な人じゃないでしょ？ ヴァルハラ政経塾だって知る人ぞ知るって感

じの学校だし」
「今回の事件で、だいぶ脚光を浴びてしまったみたいだけどな」
「うん、まぁね。それはしようがないと思う」
連日流れるニュースでは、事件そのものではなく、ヴァルハラ政経塾出身者がやれ官僚にたくさんいるだの、起業家が多いだの、大企業の幹部に多いだのというゴシップ的なものも少なくなかった。
「で、問題ってのは？」
「この国の財界にも政界にも一〇〇年以上関わってきた存在がさ、暗殺されそうになったわけよ」
「……」
「明治時代から生き続けてきたルイーゼがこの世からいなくなるなんて、誰も考えてなかったと思うの」
「なるほど？」
「今回の事件で、絶対死なないんだって思われてた彼女が、どうやら死ぬこともあり得そうだと言うことが世間に知られたわ。そしてそれによって、この国の前提が少しだけれど崩れた」
「前提？」
「ルイーゼはこれからも未来永劫、ずっと存在するだろうという前提でこの国は動いてきた。少なくともここ一〇〇年以上ね。だれも彼女の死を疑う者はいなかった」
やすらはそこでいったん止めると、あまり言いたくないような顔をしながらも言葉を続けた。
「その彼女が死にそうになったの」
「そうなるとどうなるんだ？」
「もー！ 光人だって考えなさいよ！ 探偵でしょ!?」
「もちろん色んな推理は出来るけどさ、何がヤバくて何がヤバくないのかが解らないんだ」
「たとえば、富士山って活火山だけど噴火することはあまり想定されてないじゃない？ もちろん噴火したときの事は考えてるけど、普段富士山が噴火すること前

提で毎日を過ごしてる人っていないと思うの」
「まぁそうかもな」
「今回の事件はちょっと噴煙あがちゃった、みたいな感じ？ でも鉄道も道路ももろに溶岩かぶるところにあるし！ どうしようってなっちゃってる」
「なるほどな、わかりやすい」
「ルイーゼを狙ったヤツの最終目的はまだ解らないけど……意外と日本がどうにかなっちゃう事件かもしれないのよ」
「ふむ……」
事の重大さは、何となくは理解した。
が……。
「世間に露出していないだけで、ルイーゼのような人智を越えた存在は、まだ他にもいる。ルイーゼ一人がいなくなったところで、この国がどうかなるってのは大袈裟じゃないか？」
「それは犯人が誰かにかかってるわね」
「？」
「賢者同士のやり合いなら普通の人間の出る幕はないわ。でも今回の犯人は卒業生、賢者じゃなくて普通の人間なの」
「ほう……」
「正確には事件のあったあの日、犯人は賢者になる予定だった」
「なんだよ、結局賢者同士のいざこざか？」
「ううん、賢者になったばかりの彼がルイーゼに勝てるわけない。彼は人間という枠をまさに超えようとしたばかり」
「ふむ」
「つまり普通の人間がルイーゼに一太刀入れることができたことになるわ。そんな力、ほっとくわけないじゃない！」
「あぁ……そっちか」
「政界も、財界も、そして裏社会も……みんなたぶん

血眼になって捜してるわよ。そしてその中のどれか一つが捜すフリをしてる」
「やれやれ、だな」
「さらに言うなら、日本だけじゃないわよ」
「？」
「この事件は世界中から探られるでしょうね」
「世界ねぇ」
やっぱりピンとこない。
「喩(たとえ)じゃなくて」
「ん？」
「ルイーゼを殺せるって事は、富士山を噴火させられるほどの力に等しいんじゃない？」

「……かもな」
「あーもう!!」
「なんだよ、お前がイラついてもしようがないだろ？」
「違う！　話してたらせっかくの料理が冷めちゃったじゃない！」
「そっちかよ」
「温め直して！」
「はいはい……」
このパスタは温め直すと味が落ちちゃうんだけどな……と思いつつ、光人は料理の載った皿をキッチンへと運んだ。

二、バックボーン

午前中、光人(みつと)は東大法学部の教授の下にいた。

学生はまだまだ春休みなのだが、光人は自分のゼミの教授に気に入られてしまい、春休みを返上して教授の手伝いをしている。

「おはようございます」

軽く頭を下げて部屋に入ると、巨大なデスクの上に大量に積まれた書類と本が光人を出迎えていた。

「……」

その紙の山の向こうには教授がぽかーんと口を開けて天井を見つめている。

「教授……この机は昨日片付けたはずですが……」

光人は怒りと呆れが混じった声で、積み重なっている本を何冊か手に取った。法律に関する歴史書だった。もう一つは死刑に関する本。いずれも日本語の本ではない。

「はぁ……本を出すのだけは素早いですね……」

「光人君、君の片付け方はよくない。いいかね、この本は歴史ではなく思想だと何度いえばわかるのかねー！ 探すのに苦労したよ」

しかし当の教授は光人の言葉を意に介さず、逆に文句をつけてきた。

「境目がよく解らなかったんですよ」

教授の理不尽なクレームは今日に始まったことではない。光人は聞き流しながら教授から受け取った本を、言われたとおり思想の所にしまう。

「だいたいこの本は昨日もお読みになったのでは？」

「それは意味の無い質問だ、天野君。ここにある全ての書物は、私の頭の中に入っている」
「ではいちいち取り出して読む必要もないのでは？」
あー、またワケわかんないことを言いだしたと、光人は話半分だ。
「違うのだよ、重要なのはそこではないのだよ。一度読んだ本をもう一度手に取ることによって、思考を若返らせているのだ」
「教授はまだお若いと思いますが……」
彼は三〇代にして東大法学部の教授になったらしい。そしてそれはとても異例中の異例なのだと光人は聞いていた。
「ここにある本の全ては私の脳に記憶されている。それは間違いない。しかし本は何のために読む？ 知識を得るためか？ 自己鍛錬か？ それとも自己満足か？」
「知見を広げるためではないのですか？」
「違う、創造のためだ。本で得た新たな体験を、自分の創造力の糧（かて）とするためだ」
「だからそれは知見を広げることと……」
という光人のツッコミをよそに教授は言葉を続けた。
「そのためには記憶を辿るだけではダメなのだよ天野君。本を読むというその動作、そこから創造は始まっている。初めてこの本を手に取ったとき、自分はどんな創造をしたのか？ 二回目は？ 三回目の時は？」
もうこのモードになると、教授には何を言っても無駄である。
光人は本を片付けることに専念し、教授にはしゃべらせるままにした。
「つまり本棚から本を取り出すところから、創造は始まっているのだよ。その一挙手一投足すべてを思い出し、思考を若返らせることが本を読むことの醍醐味なのだ。それをまだ理解出来ないとは、君、何年私の下についているのかね」
去年の四月からだから、一年たってませんが……と、

光人は心の中で突っ込んだ。
「だったら、本を取り出すことだけでなく、本棚にしまうことも、その創造の中に含めておいてください」
そしてツッコミの言葉の代わりに、そう答えると、最後の一冊を本棚にしまった。
「ふむ、紅茶をいただこうかな」
しかし教授はこれまた光人のツッコミにはまったく動じなかった。
ただ、光人の言うことを否定しない時は、光人の言うことも一理あると認めているのだということを、光人は最近知った。
「かしこまりました」
光人は軽く会釈すると、給湯室に消えた。
教授の今の気分は先ほどの講釈でもうだいたい解った。一通りしゃべった彼は、少し落ち着きたいのと、次の作業の準備に取りかかりたいだろう。となると温度は少しさましてから出した方が良さそうだ。

香りはそんなにきつくないものを……。
気分屋の教授に合う紅茶をコーディネイトすることは、喫茶店での役にも立つ。
光人はそう思いながら、丁寧に紅茶をいれ、そして教授の脳に糖分を届けるために、少し苦めのチョコレートを二欠片用意した。
「ところで喫茶店はうまく行ってるかね？」
光人の入れた紅茶をたしなみながら、さっきとは打って変わった落ち着いた声で、教授は問いかけた。
「ぼちぼち、ですかね」
「関西人かね、キミは。使えもしない関西弁を中途半端に使うのはやめたまえ」
「別にそういうつもりは……」
「何、君の入れる紅茶はとても美味しくてね。頭が冴え渡る。ほら、創造力が湧き上がってきた」
「それは何よりです」
「だから、繁盛すると私は思っているのだよ。そうだ、

今度店に行ってもいいかね？」
「お断りします」
「なぜだね、恩師が訪ねてくるなんてなかなかいい絵だと思うのだが」
自分で恩師っていう……と、思わんでもない。
「来たら絶対俺と話をするでしょう？ そういうのは、あの店ではしないことに決めてるんです」
「つまらぬ」
「別に手は抜いてませんよ。教授に出す紅茶は、カフェで出す時よりも手間暇かけてます。それは保証します」
光人にとって恩師であることに変わりは無いし、尊敬すべき先達である。精一杯の紅茶を味わって欲しい。
「何か混ぜたりしていないだろうね？」
「そんなことして何の意味があるんです？」
「私の座を狙っているとか」
「別に教授を陥れても、俺が教授になれるわけじゃないですから」
「確かにそうであるな」
そこでピタリと教授は口を閉ざしてしまった。
言うことがなくなったからだ。
その間にも、光人はテキパキと決められた仕事をこなす。ただ、せっかく教授が紅茶をたしなんでいるのだから、ホコリを立てるような作業は厳禁である。
まずは教授が書き散らしたメモのデジタル化。
教授の当面のスケジュールの確認。
必要な本や事務用品などを購入するための稟議書の作成。
そして最後に、教授の講演の準備。必要な手続き関連の書類と講演内容に関する書類と論文とレポート、そして移動中や待ち時間などに読むための本。
残すはこの部屋の掃除であるが、これは教授が出掛けたからしようと光人は思った。
「まだ、出掛けるのには時間がありますね」

全ての準備を整えた光人が、沈黙を破った。
教授はなにをするでもなく、空になったティーカップを前に、ぼーっと天井を見つめている。教授がこの状態になったときは本当に呆けているわけではなく、何かを考えている時らしい。
「ん？ ご苦労」
我に返った教授はいつの間にか用意されているアタッシュケースを満足そうにみつめた。
他人が準備したものだというのに、その確認もしない。それだけ光人を信頼しているのかもしれないし、ただ単にものぐさなのかもしれない。
「何について考えておられました？」
まだ時間があるので、光人はティーカップを片しながら尋ねてみた。
「私が法律以外のことで考える事があるとでも？」
「晩御飯のメニューとか」
「キミは私を馬鹿にしているのかね？」
「食は全ての原動力です。何を食べるか真剣に考えることは、決して無駄ではないと思います」
「フン、そういえばキミは私に平気で口答えをする学生だったな。だが、君の口答えは聞くに値する」
「そう言っていただけると、嬉しいですね」
「だがその媚びた態度は気に入らないな」
「では何と返せば……」
「それは君自身が考えたまえ。それが個性というものだ」
「では、改めて……素直に嬉しいです」
光人はにっこりと笑った。
「では答えてやろう。」
「今日のこのあとの予定についてね……」
予定？
そう言われて光人は教授のスケジュールを Google（グーグル） Calendar（カレンダー） で確認した。このあとは講演に呼ばれていると思ったのだが、その講演とは教授が話すほうではな

く聞きに行くほうだった。
「教授が講演をするのではなかったのですね……しかもＤＮＡ、遺伝子ですか？」
「楽しみで仕方がない」
「一見法律とはあまり関係なさそうですが、こっちの分野も興味があるんですか？」
「それが法律と無関係というわけでもないのだよ」
「というと？」
「遺伝子によって形作られている法律があることに気付いてね」
「遺伝子によって形作られている法律？」
「例えば本能とかね」
「……なるほど」
「他にも良心や集団生活の中で自動的に形作られる決まり事なども含まれるかもしれん。それらは教えられたわけでもないのに自然と法律として機能している」
「自然が法律を作り出す、ということですか？」
「それは私も解らぬが、今日の講演で少しは何か垣間見えると思ってね。どんな知識が待っているのかわくわくする」
　教授は嬉しそうに笑うと、ゆっくりと立ち上がって光人が用意したカバンに手を掛けた。
「それに、もし遺伝子に法が刻まれているなら、それこそが法の原点だとは思わんかね？」
「考えた事もなかった……」
「もちろん、ただのこじつけの可能性もあるがね」
　教授は笑うと肩をすくめた。
「さて、心地いいウチに出掛けるとするよ」
「まだ時間が早いですが……」
「もう少し思考していたい。だが、キミはこの部屋を掃除したいだろう？」
「ここは教授の部屋ですよ、俺に気を使う必要はないと思いますが……」
「外で思考したいのだ。君の紅茶のおかげで、今日は

とても冴えている」
「ではもう一杯いかがですか？ それくらいの時間は充分にあります」
「それもいいアイデアだ、いいただくとしよう」

＊　＊　＊

ルイーゼを襲撃した生徒の遺体は、事件のあった根津からは直線で一七キロメートルも離れた井の頭公園で発見された。
発見時刻は事件翌日の夜。井の頭公園は乗降客の多い吉祥寺駅の南側に陣取り、公園内は深夜でも人通りが絶えない。したがって夜に発見されたと言うことは、それまでそこにはいなかったと言うことになる。
そして死亡推定時刻は、ほぼ発見時刻と重なった。
「で、何かわかった？」
やすらが検視室に入ってくるなり、担当者に話しかけた。その声は少し苛立っているような印象も受ける。
彼女は朝から別件で都内を走り回り、やっと一段落して、公安六課が検視に使っている東大付属病院に到着したのだ。
検視を始めてから四時間が経過していた。
「わかったことはたくさんありますが……」
そう言いながらチェックリストをよこす。
「やっぱりルイーゼと同じ呪いが働いているのね」
リストには医学的なことと、そして魔的なことが書かれていた。魔的な方には力の源とそれに関係する呪文や魔法陣などが荒く書き込まれている。呪いはとても強力なものだが、種類としてはいわゆる悪魔の力であり、魔術としてはオーソドックスなものであった。
「呪いはとくに右腕がひどいですね。右手はほとんど腐り落ちています」
「彼が呪いの呪文を唱えたからかしら？ でも呪いをかけるのはルイーゼに対してよね？」

「あの理事長を殺害するなら、自分自身を呪いの犠牲にするぐらいはしないとダメだと思います。たぶん悪魔に自分の魂を捧げたのでしょう」
「なるほど……つまり最初から差し違える覚悟だったってこと？」
「それが濃厚です」
「そして剣を受け取ったとき、一気にその呪いを剣に込めた」
　ブラインドネスの力はその時に放たれた副産物かもしれない。
「しかし不可解なことがいくつかあります」
「なに？」
「まずこの生徒が自分に呪いをかけていた場合、ルイーゼは生徒を見ただけでそれを見抜けたはずです」
　周囲に漏れ出すほどに呪いは強かった。それは普通の人間が隠し通すには不可能であるほどのエネルギーを持っていたと検視からは推測できたのである。

「つぎに瞬間移動です。賢者になったばかりのこの生徒に、そんなことが出来たんでしょうか？ それに脱出後に生き続けていたことも気になります」
「ルイーゼを呪うことが出来るなら、テレポートや蘇生もできそうな気はするけど……」
　といったものの、やすらも首をかしげた。
　生徒はルイーゼの魔法の矢によって片足・片腕を吹き飛ばされ、さらに腹をえぐり取られている。その痕（きずあと）は三〇ミリ機関砲で撃ち抜かれたごとく、無残だった。そんな状態で果たして意識を保つことなど出来るだろうか？ たとえ賢者であったとしても、ここまでの致命傷を負えばショック死するか意識などどこかに吹き飛んでしまうはずだ。
　瞬間移動の魔法など、使える意識があったとは思えない。
「やはり第三者がいると見た方がいいわよね……」
「そうですね、例え彼が有能な術者であったとしても、

瞬間移動し、その後も生き続けることなどムリだったと思います。でも、それはそれで不可解なこともあるんです」
「なに？」
「治療痕がないんです。第三者がいて、そして彼が発見される直前まで生きていたとしたら、治療を試みたはずなんです。ですが彼にはその痕跡がない。なのに生活反応は発見される直前まであった」
内臓もほとんどなく、片足・片腕のないままで生き続けた。
そんな生命力は人間にはない。
「不可解です」
検視官は首を左右に振った。わかればわかるほど、彼の状況は解らないことだらけであった。
「彼の霊と話をすることはできるかしら？　可能なら契約している聖職者を手配するけど」
「おそらくですが……魂はもうないかと」
検視官は低くゆっくりとした口調で首を横に振った。
「やっぱり？」
「とても強い呪いなので、魂はすでに契約した悪魔に持ち去られていると考えるのが妥当だと思います」
「そっか……」
やすらは残念そうにうつむいた。
しかしここまで自分を犠牲にしてルイーゼを討ち取りたかった理由はなんだろうか？
ヴァルハラ政経塾の生徒なのに？
いや、そもそもルイーゼを討ち取るために入学したのかしら。その思いをずっとひた隠しにして賢者になるために努力して、卒業式まで待っていたってこと？
などとやすらは思う。
「まぁいいわ、ダメ元でも一応やりましょ。聖職者からの意見も聞いてみたいし、どうせ残っている呪いも払わないとダメでしょ？」
聖職者ならば、この生徒が契約した悪魔の名前がわ

かるかも知れない。
まぁ解ったところで、その悪魔と接触するのは非常に危険だが……。
「それもそうですね」
公安六課にいる魔が扱えるメンツは魔術師寄りの人間ばかりである。呪いや霊魂といった分野は宗教者が得意とする。
公安六課に宗教者がいないのは、多分に政教分離の影響である。が、それだけだと事件が解決しないこともあるため、力ある宗教者――僧や神主、神父や牧師、祈祷師など――と契約して、必要な時に来てもらったりしている。
「それからこの生徒の情報は？」
「学校と家族から取り寄せたものがこちらに」
やすらの後ろにいた別の捜査員が、タブレット端末をやすらに差し出した。
「遅いわよ、昨日揃っててもいいんじゃない？」
やすらが口をとがらす。
「申しわけありません……」
「と言っても……いいことしか書いてないか……」
スワイプしてざっと資料を見渡すが、表の情報などたかが知れる。
幼稚園の頃からいいところに入って、小中と成績優秀で、模範的生徒で、その後ヴァルハラ政経塾にスカウトされている。
いじめや親の虐待があったのかはこの資料では解らなかった。もちろんルイーゼとの接点も。
「ふぅ……」
やすらは乗り気のしないため息をつくと、遺体に近づいた。そして彼の額に触れようとした。
「あ、あまり触らない方が……」
「大丈夫よ」
やすらはそう答えると、そっと彼の額に手を当てる。
なるほど、凄まじい負の影響下にあることは感じる

がしかし力はもうほとんどない。やすらはこの生徒が何か心に闇を負っていなかったかを探るために脳に侵入しようとしたが、うまく記憶を取り出すことは出来なかった。

「ふ～ん」

ただ解ったことがあった。

「何か解りましたか？」

「何にも解らないってことが解ったわ」

「はぁ……」

検視官があからさまに呆れたような表情をする。

「どんな死に方をしようと、一応記憶は断片でも残ってるもんだけど……」

「そうですね、死んでいたとしても少しは残ってるはずです」

「なんにもないわ。なんにもないというか……」

やすらは彼の脳の中を再度確認するように覗き込む。

「もちろんすっごい断片的なのはないこともないんだけどー……」

彼の記憶を一枚の紙に例えるなら、その記憶が書き込まれている紙の中心に真っ白なインクをボタッと垂らし、筆で一気に塗りつぶしたようなそんな状態だ。塗りつぶされてない所、塗りつぶされていても薄く残っているところはなんとか記憶が垣間見える。

「もし、ルイーゼを殺したいと強く思っていたのなら、こんな記憶の残り方はしないと思うのよね。動機そのものが、記憶に残ったままのはずよ」

殺したいほどの思いだ。残っていないわけがない。

「課長！ ちょうど空いている聖職者、一人捕まりました。しかもたまたまこの病院にいたそうです」

そこへ鑑識の一人が検視室に入ってきた。

「あら、ラッキーじゃない」

やすらが嬉しそうに振り向いて、その鑑識の向こうにいるであろう人物に視線を向けると、一気に不機嫌そうな表情になった。

「って……」
鑑識に連れられて入ってきたのは、落ち着きのある雰囲気を持った女性だった。何よりも清楚というイメージがふさわしい。優しそうな瞳、姿勢のよい所作、どれを取っても非の打ち所などない美しさ。紫の髪が印象的だった。
そしてもう一つ目立つのは、大きな刀を持っていることだった。それは普通の刀よりも遥かに長く、腰にはおさまらないため、彼女はそれを抱きかかえるようにして持っていた。
「ごきげんよう」
気持ちのいいスラーでその女性はやすらに会釈した。
「聖職者が必要だと伺いまして、ウフフ」
そして少し余裕を持った笑みを見せる。
「ちっ、呼ばれると思ってこの病院でずっと張ってたんでしょ？」
「はい、そうしないと遺体を調べることはできないと思いまして……私も契約者リストには入っておりますから、問題はありませんよね？」
「まぁ、呼んじゃったんだから仕方ないわ」
一本取られたという気持ちが強いが、しかし呼んでしまったものは仕方がない。この場は相手の勝ちだ。
「誰です？」
「橘瑠璃火。ルイーゼの側近よ」
やすらは早口で鑑識と検視官にそう告げた。
「は、はぁ……」
「ここで検視があるって誰かに喋った？」
と聞こうとしてやすらは声には出さなかった。そもそも公安六課がここ東大付属病院で検視をすることは、契約している聖職者なら皆知っていることであった。
「朝からずっとお待ちしておりました。いつ呼ばれるかヤキモキしましたわ。受付の人には不審な目で見られますし……もっと早く呼んでくだされば よかったですのに」

「不審者扱いされて追い出されればよかったのよ！」
「ウフフ、そこは持ち前の育ちの良さでクリアいたしましたわ」
嫌味の無い瑠璃火の笑み。
その仕草と言葉遣いはたしかに育ちが良さそうである。やすらが絶対に身につかない感じの。
「フンだ！」
やすらはプイとそっぽを向くと、瑠璃火に場所を譲った。
「……」
瑠璃火は遺体の前に来ると持っていた太刀を立て掛け、まずは自身の両手に聖水をかけた。それから聖書を取り出し、お決まりの言葉と祈りを捧げ、ようやく彼女は遺体に触れた。
ここからは彼女の独壇場である。
検視官もそしてやすらも専門外であるため、口出しはできない。ただ変なことをしてないかどうかだけは見守っていた。
「橘さまは修道女さんか何かで？」
「巫女よ」
「は？」
「実家が天使を奉ってた神社だったらしいわ」
「はぁ、そんな神社があるんですね」
「日本はなんでも神様にしちゃうから、天使を奉った神社があったっておかしくないんじゃない？ ほら、隠れキリシタンがいた九州には、聖人とか天使を奉った神社があるらしいわよ？」
「そ、そうなんですか」
検視官は少し納得がいかない様子だった。
「橘家は天使が守護神ですからね、天使とともにこの地にやってきましたから」
不意に瑠璃火が振り返ると、にっこりと笑った。
「あんたの家の事なんてどうでもいいわよ。それよりも、なんか解ったの？」

「ええ」
すると瑠璃火は立て掛けてあった太刀を手に取ると、柄の方をすっとやすらに差し出した。
「ちょ！」
やすらがまるで毛嫌いするように後ずさる。
「どういうことですか？」
隣りにいた検視官が間に入ろうとするが、それをやすらがあわてて引っ込めた。
「その刀に触れちゃダメよ！」
「は、はぁ」
「これが、わかったことです」
瑠璃火は太刀を引っ込めると、深く頷いた。
「なるほどねー……」
暗殺のあらましが、やすらの中でも概ね構築できたようだった。
「この生徒は……操られていただけってことね」
「はい、真の犯人は彼ではなく、剣だったのです」

「剣ですか？」
検視官と鑑識が揃って首をかしげる。
「ルイーゼが賢者の儀の時にこの生徒に手渡した剣のことよね？」
ヴァルハラ政経塾が生徒のために用意した特別な剣である。そしてその剣によって、ルイーゼは貫かれた。
「はい。おそらく何者かがその剣を、意志のある剣と入れ替えたのだと思います」
「意思のある剣ですか……」
検視官も鑑識もさっきからずっと驚きっぱなしだ。
まぁ、ムリもない。
「意思を持つ剣に知力で勝てなければ、たちまち支配されてしまいます。支配されてしまったら、あとは……」
「その剣の意のままと言うことですか」
「そうですね」
その答えに、先ほどやすらが刀に触るなと言われた

ことが結びついて、検視官は改めて瑠璃火の持つ太刀に視線をやった。
「そうです、私が持っている刀もまた、意思を持っているのです」
「でも待って、それでも疑問が残るわ」
やすらが一つ矛盾に気づいた。
「はい、私も疑問はあります。これほどまで邪悪な剣を、ルイーゼ様も触れています。なぜ、入れ替えられたことにお気づきになれなかったのか……」
どうやら瑠璃火も同じことに気づいたらしい。
「卒業生に授ける予定だった本来の剣も、意思を持った剣だったの？」
「いいえ、魔法のかかった剣ではありましたが、意思を持つほどのものでは……そもそも意思を持った剣はそうありませんから」
「じゃぁ、ずっと力を隠してたってこと？」
「本来、武器とは無機質なもの。武器に徹すれば己の力を隠せたのかも知れません……もし、ルイーゼ様が剣を持ったとき、術を使って調べていたら」
「バレてたかも知れない？」
「死亡推定時刻についてはどうです？ 彼は発見される直前まで生きていました」
検視官がさらに疑問をぶつける。
「剣が生かしていたんだと思います。けれど、生徒は意識的にはもう死んでいたと思います」
「というと？」
「片腕と片足を失い、内臓もほとんど無くなった状態で脳が正常にいられるわけはありません。彼の意識は発狂するかショック死状態だったと思います。ただ剣の持つ生命力だけで身体がかろうじて代謝していた……」
「そ、壮絶ですね……」
もし自分がその立場になっていたら……検死官は身を震わせた。

「と言うことは……」
やすらの表情が険しくなる。
「はい、剣は別の誰かを支配したことになります」
「その時点で、剣の支配下から抜けたこの生徒は絶命したってわけね」
「つまり今も……」
「剣に支配された人が、どこかに……」
「それは相当ヤバいわね、あの剣はルイーゼを殺せる程の力があるのよ？」
「能力も未知数です。解っていることは、強力な呪いが使え、ブラインドネスが使え、そして……」
「テレポートも使える。しかも、自分の力を隠すこともできるみたいよね」
「とんでもない剣です。きっと他にも強力な力を持っていると思います」
「その剣を止めるのは、簡単じゃないわ」
「でもこれだけ強力な剣です、どこかの歴史に刻まれていると思います。特に意思を持った武器は限られているはずですから」
「それはそうだけど……」
「橘家の資料もあたってみますけれど……」
瑠璃火が物欲しそうと言うか、ちょっと上目遣いで何かを求めるような視線をやすらに向けた。
「なによ？」
やすらが不機嫌そうに睨(にら)み返す。
「いわく付きの魔の品々については朝日奈さんの方が詳しいと思います……資料もたくさんお持ちですし」
「あー……」
そういえばそうだったとやすらは思ったものの、それは口に出さなかった。出したら瑠璃火に嫌味の一つや二つ、言われそうだったからだ。
「朝日奈さんは公安六課の課長でもありますけど、マルタ騎士団のエージェントでもありますものね」
だが、黙っていても瑠璃火の方からやすらをいじっ

てきた。
「マルタ騎士団？」
「あー、もういいからいいから、わかったわよ、調べとくわよ！」
「期待していますわ」
「あのね、あんたのために調べるわけじゃないんだけど！ ルイーゼのためでもない!! この国では、あたしは警察官なんだから」
「けれど、私のおかげで捜査は進みそうじゃありませんか？」
「ぐっ」
「ルイーゼ様をあのような目に遭わせた以上、このままではすまされません」
瑠璃火はそう言うと、太刀を掲げた。
「ダメよ、ここは東京、人口密集地帯よ。力を使うなんて許されないわ。東京を戦場にする気？」
「お言葉ですがこの街を守る義務が、私たちにもあるのです」
清楚で穏やかな瑠璃火の表情が鋭くなる。それは完全に戦うモードになっているようにも見えた。
「賢者のことは賢者に。それは、朝日奈さんでも解っていることではありませんか」
まるでやすらたち警察が役立たずと言わんばかりだ。
「あたしたちには事件を捜査し、犯人を逮捕する義務があるわ。それにこの国は法治国家よ。賢者と言えども、法律に従う義務があるでしょ？」
「フフ、もう犯人は捕まったではありませんか」
だが瑠璃火は目を伏せると、ゆっくりと首を振った。
「う……」
「すべてはこの生徒がなしたこと。おそらく警察もそれを望んでいるのではありませんか？」
確かに実行犯である生徒は、いま目の前にいる。
亡骸となって。
世間への説明は、これで全て済む。

「ココから先は……」
瑠璃火は目を開けると、その鋭い眼差しをやすらに向けた。
「賢者の領域です」
そしてほくそ笑むと、検視官たちに軽く会釈して検視室を出て行ってしまった。
やすらが舌を出して、去りゆく瑠璃火の背中に向かってにあかんべーをする。
「要約すると、知能を持つ剣が卒業生を操ってルイーゼを殺害しようとしたってことであってますか？」
そんなやすらの隣で真面目に鑑識が調書にペンを走らせていた。
「まぁそういうことね。そしてあたしたちはその剣を探すことが仕事ってことになりそうね」
「なるほど」
「でもたぶん、あんたたちじゃ見つけられないわ」
ルイーゼが触れても解らなかった。
あの大魔法使いであるルイーゼが触れても。
その正体を隠し通した。
特別な剣であることに間違いは無い。
「あたしでも……難しいかもしれない」
やすらは下唇をかんだ。
「あ、最後のマルタの下りは削除して。それから賢者の義に使われる予定だった本来の剣をヴァルハラ政経塾から押収しといてね」
やすらはチラ見した報告書に「マルタ騎士団？」というメモを見つけて、それを指ではじくと検視室を出て行った。

＊　＊　＊

昼下がり、教授を送り出した光人が呼ばれたのは皇居の真ん前、半蔵門にあるテレビ局だった。
世間ではまだヴァルハラ政経塾のことが取り沙汰さ

れており、半蔵門に向かう電車の中の液晶モニタには引き続きニュースが表示されていた。
『なぜテレビ局に？』
光人は首をかしげながらも東京ＭＸが入るビルの入り口をくぐった。
「やぁ」
するとロビーでは二階堂がすでに待っており、にこやかに挨拶をしてくる。
「よう」
光人も軽く手を上げて応える。
「なんだか素直じゃない表情だね」
二階堂がにこやかな笑顔を崩さずに光人に近づいた。
「いや、てっきり事務所か都庁に呼ばれると思ってたから……」
「フフ、驚いたかい？」
「ああ」
光人は素直に頷いた。
「理由はすぐにわかるよ」
二階堂はそう言って、受付を素通りして光人をエレベータに案内した。
六階で降りるとエレベータホールの窓には皇居の景色が広がっていた。
「へー……」
光人は窓の外に広がる景色に何となく目を奪われた。
こうしてみると広大で緑豊かだと光人は思った。
都会のオアシスとは使い古された言葉ではあるが、良い喩だとも思った。
「どうしたんだい？」
先を歩いていた二階堂も足を止めた。
「あ、いや、皇居を上から眺めるなんてあんまりないからさ。こんなに緑が豊かなんだなって思ってね」
光人はすぐに窓からは視線を外し、距離の開いてしまった二階堂に近づいた。
『ん……？』

窓から二階堂に視線を移すとき、視界の端になにか黒いものが通り過ぎたのが少し気になった。

すると二階堂が得意そうな笑みを浮かべたまま、皇居のある一点を指さした。

「そうそう、あれが今建設中のＡＩビルだよ」

二階堂に言われるがままにその指の差す先を振り返ると、さっき視線の隅を横切った黒いものがそれであった。

大きさはそう大きくはない。高さ五～六階建てぐらいのビルだろうか？ それが皇居の敷地内に建っている。その黒いものはいわゆる建設中の建物を取り囲む足場を覆う足場幕だった。つまりあの幕に囲まれた中で何かを建設しているのだろう。

気味が悪いのは、通常足場幕には建設会社のロゴマークや名前が入っているものだが、真っ黒で何も書かれていないことだ。なんとも異様な風景だ。

おかげで真っ黒い物体が、木々に囲まれた場所にょきっと建っているように見える。

いや、ロゴマークのようなものはよく見ると描かれていた。黒い幕と同じ黒で、幕の中心に翼が描かれているのだ。それは三対六枚の翼が円を描くように並べてあるものだった。

光人はどこの建設会社なのだろかと思ったが、それ以前にあの翼の配置はかなり上位の天使を表すのではないかとも思った。ただその場合は、白い翼だが。

「ＡＩビルってことは、アレか、行政判断にＡＩを導入するっていう……」

「そう、公平を期すためにね。恣意的な判断を下さない、東京都のフラットな頭脳になるのさ」

フラットねぇ……。ＡＩはコンピュータだからそう思ってくれる人は多いのかもしれないが、学習させるデータで実はどうとでもなる。果たして本当にフラットなＡＩになるかどうかは疑わしいものだ。

「あんなところに建設してるのか」

「あそこは江戸城の旧本丸跡なんだ。石垣はそのまま利用して、実際のコンピュータは地下に建設中さ」
「地下に？」
「地震や火事で動かなくなっても困るしね。例え孤立しても動き続けることができるように、様々な仕組みが必要みたいなんだ」
「ずいぶんな念の入り様だな」
「眠らない町には眠らない知事が必要なのさ。それに、名実ともに一国の主になるわけだしね」
「どういう意味だ？」
「フフ、行けば解るよ、光人君。さぁ、こっちだ」
どこか冷たさを孕(はら)んでいるけれどもにこやかに二階堂は笑って、先を歩いた。
通されたのはとある編集室。そこで最近収録したと思われるニュースソースの編集が行われていた。コントロールする卓に二人、その後ろに一人の男が立っていた。年の頃は六〇を過ぎたぐらいであろうか？しかしその佇(たたず)まいや表情からは、力強い気力に満ちていた。とても六〇代には思えない気迫を光人は感じた。
彼は二階堂たちに気づいて視線を一瞬だけ送るがすぐにモニターに集中し、コンソールにいる二人にあれこれと指示を出していた。どうやら今は忙しいらしい。
「そんなに長い番組じゃないから、すぐに終わるよ」
二階堂はそう言って作業の様子を眺めた。
内容はどうやら知事を中心としたニュース映像のようだった。
「知事の番組を作っているのか？」
「都政を解りやすく都民に理解してもらう為にね。放送枠をとるのに苦労したよ」
なるほど、だからＭＸテレビなわけか。
「それにここで作られた映像は一応ネット局にも配られるんだ。使うかどうかはテレビ局の判断に任せるけど、ニュースソースとして利用してもらうつもりさ」
「ふーん…」

光人は興味なさそうに答える。編集されているものを見ていると、アングル、テロップ、そしてロゴマークなど全てがデザインされ、どちらかというとドキュメンタリーに近いようだった。ただのニュース映像からはほど遠い。簡単に言えば、演出過多なのだ。

こんな作りにするのも、感情移入しやすくするためだろう。解りやすさを追求した結果かも知れない。

「東京オリンピック関連のものが多いけれど、なるべく多くの話題を盛り込んでるつもりさ」

映像は知事の活動を解りやすく、ドラマティックに作られていた。

「もはやエンターテイメントだな」

「そう、さすが光人君は鋭いね。都民に聞いて貰うにはエンターテイメント仕立てにしたほうが見てくれるんだ。ストーリーがあった方が理解もしやすいし、都政の方向性を説明しやすいんだ」

二階堂はそう言いながら、チラシも見せてくれた。

税金の使い道、都政の独立性、高齢者対策、待機児童などなど多岐にわたる内容が一言で説明されていて確かにわかりやすい。これらのフレーズを考えたのは都職員ではなく、プロのコピーライターなども動員されているようだった。

「ん、終わったみたいだ。最後にとっておきの映像を見せてあげようかな」

二階堂は変わらぬ冷淡でにこやかな笑顔を保ちながら、奥の男に近づくと何やら二、三言会話を交わした。

「これはニュース映像と言うよりは、完全なプロモーション・ビデオなんだ。来月に予定されている関東首長会という知事の集まりがあるんだけど、そこでお披露目される予定さ」

そう言いながら二階堂は編集している二人の間に割って入って、コンソールをいじりだした。

「みたら、光人君もビックリすると思うな」

すでに編集済みのフォルダから一つの動画を選ぶと、

それが前面の大きなモニタに映し出された。
上空から見た東京、そして関東平野が広がり、その向こうに埼玉県、茨城県など関東の北側を映し出した。
「まずは関東の知事たちにこのビデオを見て貰って、これからの新しい関東、いや東日本のあり方を検討して貰うんだ」
ビデオはシークバーから察するにそんなに長いものではなかった。
江戸時代から東京の成り立ちが語られ、さらに関東平野、古くは蝦夷と呼ばれていた時代にまで触れ、関東独自の文化が紹介される。そこに現代の東京の空からの景色がオーバーラップし、都庁へとズームインしていく。最上階にほど近い窓ガラスに都知事が立っているのが見え知事がアップになると、彼女は両腕を掲げてこう宣言するのである。
「我々は不自由な過去を断ち切り、真実と正しき権利のために、日本国より出で、新国家を設立することを宣言する！」
その知事の言葉と共に、センセーショナルに、「東京独立」の文字が画面一杯に躍った。
「ぶっ！」
思わず光人が吹き出す。といってもそれは笑ったのではなくて、驚いたのだ。
「おかしかったかい？」
フェードアウトしていく画面をバックに、二階堂が薄笑みを浮かべた。
「いや、トートツ過ぎて……」
光人は驚きを隠さずに目をまん丸くした。
「今、この巨大な街に求められていることは、これなんじゃないかと思っているんだ」
「日本から独立することが？」
「もちろん、すぐにでも独立できるなんて思ってはいないさ。何年、下手したら何十年も先の話だよ。でもこのための布石は打っていこうと思っているんだ」

「独立する必然性が解らない……」
「フフ、目的は東京だけじゃないんだ、光人君。ゆくゆくは関東全域、そして東北地方も独立させる壮大な計画だよ」
「さっき言ってた一国の主ってこのことだったんだな……だがなんの意味があって？」
「それはまだ秘密だよ。ただ、この街が持つ力をボクたちは信じてるんだ。膠着状態に陥ったこの国からまずは羽ばたくことが、この街の使命……いや運命なんじゃないかって」
二階堂は目を輝かせながら、大きく頷く。
「って言われてもなぁ、あまりにもブッ飛びすぎて世論が納得するのかも解らない……」
「今に解るよ。なぜ独立が必要なのか。光人君だってボクたちと一緒にいれば理解するはずさ。この街に秘められた力、いやこの街の宿命みたいなものかな」
やれやれ、いったい知事になにを吹き込まれたんだかと光人は少し苦笑したが、二階堂の目は真剣そのものにみえた。
「どう、進んでいるかしら？」
と、不意に声が後ろからしたので、光人は慌てて振り返った。
光人のその視線の先には、東京都知事が立っていた。
テレビでよく見るので顔は知っているが、生で見たのは初めてだった。
シックな色にまとめられたスーツに、アクセントとして緑のラインが入っている。この鶯色に近い緑は選挙の時から使っている彼女のキャラクタ カラーだ。
「フフ、はじめまして」
彼女は右手を差し出すと、にっこりと笑った。
「は、はじめまして」
余りの急な登場に、光人は少し戸惑いながら知事の右手を握り返した。
ただ知事がしている勾玉の首飾りを光人は見逃さな

かった。八つの勾玉を連ねたもので、一つ一つが見事な大きさだった。美しく輝いている。
間違いなく魔法の品物（マジック・アイテム）であった。
「君が二階堂が言っていた東大の優等生クンね」
「天野です。微力ながら協力することになりました。よろしくお願いします」
「二階堂からいろいろ話は聞いているわ」
「期待に応えられるかはわかりませんが、親友からの頼みですから、精一杯やらせていただきます」
「頼もしい言葉です、何か解らないことがあったら二階堂か、土屋に聞いて」
すると自分の名前が聞こえたのか、しかめっ面で座っていた男が、スッと立ち上がってこちらへとやってきた。
「よろしくお願いします」
光人は土屋と呼ばれた男に向き直ると、右手を差し出した。
「ふん、よろしくな」
野太い声。
しっかと握り返すその手は分厚く、とても固い。そしてその表情は不敵で自信に満ちあふれているように見えた。
なるほど、彼が知事お抱えの賢者か……。
光人は心の中でつぶやく。
「映像のできはどう？ 一通り見せて欲しいのだけど」
「もう出来ている。関東首長連合会用の動画も三通りほどね」
「あら、早いですね」
「政策進捗動画と新政策お披露目（ひろめ）動画も出来てます」
「テレビ局への手配は？」
「担当ディレクタとの折衝はすんでいて、あとは広告代理店にまかせれば終わりです」
三人はさっそく仕事の話を始めてしまった。
彼らの話し合いが始まった段階で、光人はもう置い

てけ堀だ。
当たり前と言えば当たり前だが。
「今日は顔合わせだけだから。来てくれてありがとう、光人君」
このままここにいれば良いのか、それとも退室した方がいいのかと迷っていた光人に気付いた二階堂が一言そういうと、にっこりと笑顔を返した。
「それじゃ、失礼します」
光人が頭を下げる。
「ご苦労様」
光人に振り替えもせず言葉を返す知事を尻目に、光人は部屋を出て行った。

＊　＊　＊

四谷の古びたビルにマルタ騎士団の大使館はあった。築四〇年は優に超える六階建てのビルで、扉を開けるとツンとカビ臭いような何か古い建材の臭いのような饐(す)えた空気が漂(ただよ)う。
マルタ騎士団とはその名の通り、その発祥は十字軍である。何百年の時を経て、今では紛争地・戦地・貧困地への医療従事を目的とする組織であり、国としての主権を認められている特殊な組織である。
この一見無害そうに見える騎士団にはもう一つの顔があった。
それはこの世界のパワーバランスを監視することである。
世界中に散らばるマルタの騎士達は賢者を監視し、常にその動向を探っている。それは賢者の力がこの世界にとって強大すぎるからである。彼らが私利私欲のために勝手に行動したら人類が滅亡しかねない。
それを予(あらかじ)め阻止するためにマルタ騎士団は世界各地に支部を持ち、そして世界各地に賢者を配置している。そのため一つの組織としては最も多くの賢者を抱えて

おり、これはマルタの矛盾とも言われている。
賢者同士のパワーバランスを保つために最も多くの賢者を有すりことになり、最もパワーを持った組織となってしまっているのである。
「ここに来るのは久しぶりだわ」
やすらは執務室の来賓用のソファに座ると、少し目を細めた。
ビルはボロいが中の調度品は一級品が揃っていた。とはいえそれは単純にマルタ騎士団が古い組織だからであって、わざわざ価値ある骨董品をそろえているわけではない。昔から使われていたものが置かれていると言うだけのことである。
彼女の正面にはやや白髪が交じり始めた初老の男が座っていた。落ち着きのある雰囲気があり、ナイスミドルと言う言葉がふさわしいヨーロッパ人だ。
「ヴァルハラ政経塾のことはこちらでも調べている。いくつかのメジャーな勢力が動いてはいるが、いずれも水面下だ」
低くくぐもりがちな声がよく響く執務室に反響する。
「事件に直接関わってそうなのはいたりする？ こっちはとりあえず犯行の経緯はだいたい掴んだって感じだけど、誰がコレを仕組んだのかはサッパリなのよ」
「今日、日本入りしてきた賢者だ」
男はばらっと四～五枚ほどの写真を広げた。
やすらはソファから立ち上がって、大きなデスクに広げられた写真の一枚を手に取った。どれも成田と羽田の防犯カメラの画像だが、パスポート写真もあった。
「中国にドイツに……ルクセンブルク？」
「ドイツはルイーゼの関係者だ。ルクセンブルクはEUから使命を帯びたようだ。中国は独自と思われる」
「なるほどね」
「中国の賢者はこいつとすでに会っていることが解っている」
男はパスポート写真の人物を指さす。

中韓の息のかかった賢者は日本国内に何人かが住んでいることがすでに解っている。中国から来た賢者は日本在住の賢者と合流したようだった。
「国内の賢者の動きはそう慌ただしくはない。首相と官房長官の秘書、財界からは数人がルイーゼの元に向かってる」
「その動きからすると、彼らも犯人像は掴めてなさそうね」
「寝耳に水だろうよ」
「野党は？」
「特に賢者レベルでの動きはない。情報収集はしていると思うがね」
「賢者のランクは？」
「中。こいつが中の上」
彼はのＥＵの男を指さした。
「ルイーゼのランクからしたら、妥当か……本家橘家は……全く動きナシなのね。身内なのに……」

橘家というのはルイーゼの上司に当たる。封建時代（江戸時代以前）は橘家が領主でホラント家が執政を担い、二人三脚で領土を守ってきたという。
「ふーん……」
一〇〇年以上もこの日本の発展に貢献し、今でも後進の育成に活躍しているというのに、周囲の反応はずいぶん冷たいものだとやすらは思った。
「与党は複雑な事情を抱えているから、動きづらいのだろう」
「複雑な事情？」
「ルイーゼは確かに彼らの味方でもあり保護者だが……戦後の日本を監視する役目も負っている。目の上のたんこぶと思っている連中も、少なからずいるだろうよ」
「あー、その辺、よく解んないのよねぇ。だいたいホラント家ってドイツ系なんでしょ？ どっちも戦争に負けた方じゃない？ しかもルイーゼは戦前から日本にい

たみたいだし！」
「ホラント家は古くから天皇家とも関わりがあるし、それでいてキリスト教徒でもあるからアメリカも利用しやすいと考えたのだろう。特に賢者が絡めば、なおさらな」
「ふーん……そんなもんかしら」
何となく納得がいかない。
ま、アメリカとホラント家の間で何らかの密約はあったのだろうとやすらは思った。
そもそも国家間の利害と賢者同士の利害は必ずしも一致しない。戦勝国側の賢者とルイーゼがつながっていた可能性もあり得る。
「それよりも、懸念点と言えば、中断された賢者の義のことだ」
「それがどうかしたの？」
「予定では賢者が一人生まれるはずだった」
ヴァルハラ政経塾で行われた賢者の義は、卒業生の一人が賢者になるための儀式だった。この義で認められた者が、賢者の仲間入りを果たすはずだったのだ。
「その賢者になる予定だった彼が、ルイーゼを暗殺しようとしたのよ？」
「で、その彼は死んだのだろう？」
「ええ、今朝、検視にも付き合ってきたわ」
「つまりだ、賢者の席は空いたままだ。違うかね？」
強大な力を持つ賢者は、誰でも成れるわけではない。
その数は六〇〇人と決められている。
「いまこの世界にいる賢者の数は、五九九人だ」
「そういえば、この間、一人が老衰で亡くなったんだっけ……ルイーゼの部下よね」
「ヴァルハラ政経塾としてはそれが一番頭の痛い問題だろうな」
「もしこの間に誰か他の人間が賢者になったら……」
「ルイーゼの勢力から、賢者が一人減ったままと言うことになる」

「ちょっと待って、この事件て……」
「その生徒が死んだことによって、状況はより複雑化したということだな。賢者の椅子は世界中から狙われるだろう」
「めんどくさ!」
やすらは露骨に嫌そうな表情をした。
捜査対象が一気に世界中に広がったのだ。しかもルイーゼを邪魔だと思っている勢力が、ルイーゼの傘の下にもいるらしい。もし政府中枢が絡んでいたりしたら、やすらが入り込む余地はないだろう。
「なにこれ、一介の警察官が扱えるヤマじゃない気がしてきた……」
「警察権力でムリならば、マルタとして動くしかないだろうな」
男は薄笑みをこぼす。
「それって、非合法で動くことになるんだけど!」
賢者を監視するマルタの力なぞ、どの国も承認していない。活動がバレれば内政干渉になってしまう。
「下手したら、我々も総出で取り組まねばならない事件になるかもしれん……」
男も頭を抱えると、やれやれとため息をついた。
ただそれにしては、まだ動いている賢者の数が少ないともやすらは感じた。いや、ひょっとしたらまだ気付いていないだけなのかも……。
「とりあえずこちらからの情報は以上だ。だが、賢者の椅子が空いている以上、今後の展開によってはもっと多くの賢者が動く可能性があると我々はみている」
「じゃ、今度はこっちが解ってることを伝えるわ」
やすらは気を取り直して、ヴァルハラ政経塾から押収した一本の剣を取り出した。
「それは?」
「賢者の義で犯人の生徒に手渡されるはずだった剣」
そう言って、その柄を男に向けて手渡した。
「ほう」

男は剣の造詣に深いようで、受け取った剣をマジマジと見つめると、感心したような声を上げた。どうやらこの剣はいいもののようだ。
「コイツになりすましたインテリジェンス・ソードが生徒を乗っ取り、ルイーゼを暗殺しようとしたの」
「インテリジェンス・ソードか……ずいぶんと珍しいものが出てきたな」
「暗殺は失敗。ルイーゼの反撃を受けて勝てないと判断したのか、テレポートで逃げたわ」
「……」
男は何も答えなかったが、表情は隠さなかった。片まゆが上がり、非常に驚いている。
「すごいでしょ？ テレポートが使える剣なんてそうそうない」
「で、今その剣は？」
男の興味は話の剣に移ったらしく、手にしていた剣を傍らに置いた。
「誰かを支配して逃走中」
やすらが両掌を上に向けて、肩をすくめる。
「いかんな」
男も深くうつむいて、ため息をついた。
「いかんのよ」
やすらも頭をかかえる。
「で、ここに来たわけ」
そして人差し指で地面を指さした。
「その剣の正体を調べろというわけか」
「そこまで能力の高いインテリジェンス・ソードなら、歴史上記録に残ってると思うの。あと、最近姿を消したり盗まれたりした剣がないかとか」
「それは世界中の博物館、美術館を当たろう」
「ありがとう。調べるのは任せるわ。あたしは、あの剣からこの東京を守らないといけない」
「他の賢者にみつかっても不味いだろうしな」
「そうね……もし賢者が手にして支配されでもした

ら……」
「冗談はやめてくれ、そんなことになったら止めるのは一筋縄ではいかんぞ」
「そしたら辞表書こうかな……」
「まぁ、それも一つの選択か」
「あら、引き留めないの？」
「人類が滅亡しても、君らは関係なさそうだからね」
「ひどい言い方！ そこまで薄情じゃないわよ。それに、あたしたちは人間に仕えるためにいるんだから」
「では我々人類が愛想を尽かされないようにせんとな」
「クス、そのための、マルタ騎士団でしょ？」
やすらはほくそ笑むと、大きなデスクの上に掛けられているマルタ騎士団のエンブレムをコンコンと叩いた。赤地に白の十字架、マルタ騎士団のホーリーシンボルである。
「人間の欲望にブレーキをかける。それがあたしたちの役目」
「いつも肝に銘じているつもりだよ」
男は真剣な眼差しをやすらに向けると、深く頷いた。

＊　＊　＊

二階堂たちから開放された光人は、ビルの外に出るとスマートフォンを取り出して、通知を確認した。二階堂と話している間にメールかＳＭＳの通知音が鳴ったからだった。
「んー……」
差し出し人の名前を見て、それから短くため息をついた。
差し出し人は橘瑠璃火だった。そして、用件は……ルイーゼに会って欲しいらしい。
ルイーゼは今、どこにいるんだ？
メールをスクロールすると、入院先の病院名と住所

が記してあった。Google Map のポインタも。
仕方ない。
光人は自宅へ戻る方とは反対方向の電車に乗った。半蔵門から渋谷へ出て、井の頭線に乗り換えるのだ。向かうは吉祥寺だった。井の頭線はちょうど東大の一～二年生が通う駒場東大前駅があるため、光人も何度か利用したことがあった。
そして今も二階堂はここに通っている。
井の頭線の終点、吉祥寺駅に降り立つと今度はバスに乗らなければならない。ちょうど調布行きのバスが出る所なので、慌ただしく駆け込んだ。
それからバスに揺られて二〇分、光人はようやく目的地へとたどり着いた。
杏林大医学部付属病院。
受付で面会の取り付けを行い、そこで待つこと一時間。ようやっと許可が出たかと思うと、今度は目的のフロアにも警備が。書類にサインして身分証明書を出して、そこからさらに東大の事務局に確認が行き……ようやく特殊病棟に足を踏み入れることが出来た。
向かう先はルイーゼ・アンナ・フォン・ホラントが入院する部屋である。
「光人さん！」
最後の警備を通り抜けたところで待っていたのは、ルイーゼの側近橘瑠璃火だった。
やすらと瑠璃火が顔見知りであるのと同じく、やすらと幼馴染みである光人もまた、橘瑠璃火とは面識があった。
この三人は同じ高校に通っていたのだ。
瑠璃火は求められて、ルイーゼに召し抱えられた。
やすらは同じく求められて警察の世界に。
光人だけが様々な誘いを断って、東大に入ったのだった。
瑠璃火の隣には大きな狼もいた。ゲリである。瑠璃火にも勝るとも劣らない白銀の毛はとても美しかった。

「久しぶり」
光人は軽く手を上げてあいさつすると、知った顔を見て少しホッとした。
このまま警備に囲まれ続けることに、少しプレッシャーを感じていたからだ。
「厳重だな」
光人は瑠璃火のあとを歩きながら、自分の後ろを指さした。
「はい、一応暗殺を考慮してのことです」
光人的には警備の大袈裟ぶりを揶揄したつもりだったのだが、瑠璃火の反応は至って真面目だった。おかげで光人の安堵も薄れ、また緊張とプレッシャーに包まれてしまった。
「暗殺？ 穏やかじゃないな。だいたい、あのルイーゼなら暗殺なんかされやしないだろ？」
光人はルイーゼの実力を、すべてとは言わないまでもだいたいは分かっている。そう簡単に死んだりする人間ではない。
「まずはルイーゼ様にお会いしてください」
「あ、ああ……」
通された病室は、窓のない完全な個室だった。
聞けば盗聴などの対策も施された特別な部屋らしい。
わがままなルイーゼのことだから私物をアレコレと持ち込んで、自分の城のようにしてるんだろうなどとも思っていたが、無機質で医療器具とベッド以外は何もない部屋だった。
「光人か、よう来たのう」
だが当の本人はいつも通りの生意気ぶりだ。いや、一〇〇歳以上の人間なのだから生意気も何も、光人の方がひよっこなワケだが。
「なんだ元気そうじゃないか」
ルイーゼのいつもと変わらない声を聞いて、光人は一度は安堵したが、すぐに表情を曇らせた。
「当たり前じゃ」

と小生意気な表情で答えるルイーゼではあるが、光人はようやくただ事ではないことを理解した。
「そうか……」
そして瞬時にルイーゼの身体の状態を把握する。
まず左腕がない。
さらにその切断部分を中心に、禍々しい気とでもいうのだろうか、どす黒い重苦しい力がにじみ出ていた。
「また厄介なのにやられたな」
光人は嫌がるルイーゼの意志を無視して、その切断されたアタリに手をかざした。
「き、来て早々、いきなりそこに触れるか!?」
と声を荒らげるルイーゼだが、動くこともできないため、そのまま光人の動作を受け入れるしかなかった。
「あんたにここまでのことができるなんて……なんだ？ 悪魔とガチンコ勝負でもしたのか？」
「フン！」
ルイーゼがぷいとそっぽを向く。
「なるほどな、警備が厳重なのもその左腕がないせいか……」
「そうじゃ……」
ルイーゼはいわゆる魔法使いである。しかも一〇〇年以上も生きる、もはや人間を超越した魔の使い手。だからそう簡単に死なないと光人は断言したのである。そして暗殺者がやって来ようが、ルイーゼならば簡単にあしらうことができるだろう、とも。
しかし片腕がないとなると、話は別だ。
魔を使うには呪文・触媒、そして動作がいる。とくに高度になるほど身振り手振りも重要となってくる。片腕がない今、両腕を必要とする術はすべて使うことが出来ないのだ。しかもルイーゼともなれば四肢を復活させることなど容易いことのはずなのに、いまだに腕が復活できていないと言うことは……。
「傷が呪われているのか」
「そうじゃ……悪い血が、妾の身体の中を巡っておる

のじゃ」
あのどす黒い血。
それはあの剣によって貫かれたためだった。あの剣は切りつけた者に不浄の力を残す。肉を腐らせ、骨を溶かし、血を汚し、たとえ致命傷を負わせられなくても、身体を内側から蝕んで確実に死へと至らしめる。
ルイーゼを抱きかかえた塾長が、一瞬で肉体を腐らせて死んだように。
「浄化は、一応進んでいるんだな」
「うむ……」
「あとはその穢れた気が完全に抜けるまで、この厳重な病室からは出られないと言うことか」
「そういうことじゃ」
まぁこれだけ厳重に守られていれば、大丈夫だろう。
光人はそう思った。それに、今は瑠璃火がいる。光人は瑠璃火を見てから病室を見渡した。すると、隅に見覚えのある日本刀が立てかけてあるのも見つけた。瑠璃火のものだ。彼女だけが使うことのできる、意思を持った刀である。瑠璃火以外の人間が持つと、持った者はその刀に支配されてしまうことだろう。
「さて、話を聞こうか」
光人は改めてルイーゼの近くに座ると、彼女を見つめた。
「お主が探偵をしていると聞いてのう」
ルイーゼは目を細め、少しはにかむような表情を見せた。本来ならば、余り頼りたくはなかったのだろうと光人は何となく察した。
「まぁな……」
一体、何を依頼する気なのかといぶかしげながら、光人は生返事をした。
「お主がまだ高校生の頃、妾の誘いを断ったのは憶えておるか？」
高校を卒業する光人のために、ルイーゼはヴァルハラ政経塾の席を用意していた。光人はルイーゼにとっ

て是が非でも欲しい人材だったのだ。
「あぁ……今の事件があったとなっては、少し気の毒だと思っているよ……」
光人はトーンを落として、首を左右に振った。
「ということは、この事件を予見して断ったというわけではないということか……」
ルイーゼが残念そうな、それでいて安堵したようなため息をつく。
「あんたでもそう思うか……俺たちはそんなに的確に未来が解るわけじゃないさ。それにもし解っていたら、忠告くらいはしてたと思う」
「それもそうじゃな……」
ルイーゼが力なく頷いた。
「探偵の依頼なら、喜んで引き受けるぜ？ 金持ってそうだし」
「現金な奴め」
「霞(かすみ)を食って生きてるわけではないんでね」
「霞を食って生きていけるクセに、嘘を言うでない」
「そりゃそうだけどさ、人間の作った社会の中で生きていくにはそれだけじゃダメってことだよ。それにそうしたのはおまえたち人間じゃないか」
社会生活は同時に経済活動の一つとも言える。現に東大に通い、喫茶店を経営している以上、無一文というわけにはいかない。たとえ何も食わずに生きていけるとしても、だ。
「それもそうじゃった」
「今月はまだ依頼をとってないんだ」
光人はため息交じりに返した。教授の手伝いにかまけていたし、二階堂からも頼まれごとをされるしで、依頼を取っていいのかも考えあぐねていた。
「フン、今時、個人の探偵業など儲かるものか」
「そうでもない」
これだけ社会が成熟しても、科学が進歩しても、悩める人間はあとを絶たない。

様々なことが解き明かされているこの時代においても人は疑心暗鬼に陥り、そして人と人との関係に悩む。
「悩める子羊は、たくさんいるさ」
その心が垣間見える光人にとって、助けを必要としている人の心の隙間に入り込めさえすれば、人は自ずと光人へ助けを求める。
「なるほどのう、お主になら人心は手に取るように解るというわけか」
「まぁな」
光人は否定しなかった。
人は心の傷に気付いて欲しいとどこかで思っている。だから光人に気付いて貰っただけで、光人に心を開いてしまう人も多いのだ。
「なるほど、探偵に向いていると?」
「とりあえずは、ね」
「依頼というのは、人捜しじゃ」
ルイーゼは瑠璃火に何か指示を出すと、瑠璃火が一枚の写真を光人に手渡した。
そこには背広がビシッと決まったなかなかの美男子が写っていた。歳は二〇代半ばか後半ぐらいに思えた。
「名は高木翔吾。ヴァルハラ政経塾の事務局員で、年間行事の取り仕切りを担当しておった」
事件の日もルイーゼを迎え、卒業式の会場まで案内し、そして教員席に座っていた。
が、暗殺時にはどうなっていたか……。
気がついたときには彼の姿は教員席からいなくなっていた。
「事件以来、行方不明じゃ」
「なるほど、この男が何か知っていると?」
「妾の部下が目下捜索中じゃが……まったく足取りが掴めておらんのじゃ。しかもこやつは賢者ではない。普通の人間じゃ」
「実家へは?」
「とっくに当たっておる。ご両親も連絡は取れておら

ぬようじゃ。こやつの住んでる場所も覗いてみたが、もぬけの殻じゃった、家財道具もなにもかも一切な」
「それは興味深いな。経歴は？」
「こちらに用意してあります」
瑠璃火がコピー用紙に印刷したものを光人によこした。ただのペラ一だが、だいたいのことは解る。
「東大出か……」
卒業後は財務官僚になるも四年後に民間に転職し、さらに一年後にヴァルハラ政経塾に転職していた。
「財務省で何かあったのか……」
「ヴァルハラへの志望動機を見る限り、なにか精神的な変革はあったようです」
官僚の世界で嫌なものを見、出世コースから外れて民間に出、それから教育者の道に……なるほどたしかに彼の心の中で何かあったのだろう。
「その写真を見ただけでは、解らぬか？」
「……」

確かに写真からその人の情報を引き出す方法はないわけではないが……。
「真っ白だな」
光人は首を左右に振った。
「どういうことじゃ？」
「たどれないということだ。この写真から見えてくるこの男の背景っていうのかな、それがまったく伝わってこない」
それにたどれていたら、おそらくルイーゼでもできたのではないかと光人は思った。
「ここから言えることは……なんだろうな」
光人は腕を組んだ。
一番確率の高い答は、既に故人になっていることだ。
しかし、事件はほんの数日前だ。さすがに二日や三日で彼の存在そのものが全て消えるなんて言うことはあり得ない。遺体もどこかに存在しているだろうし、魂だってどこかを彷徨(さまよ)っているはずだ。

「もうこの世にいない可能性が高いことは解るんだが……それでも辻褄は合わない」
「少なくとも事件の時には生きておったのじゃぞ？」
「あぁ……」
「こやつを探してくれるか？」
「いくらだ？」
「いくら欲しい？」
「そうだなぁ、この男の価値から判断するのがいいか。あんたにとってこの男はどれくらいの価値がある？」
「難しい質問じゃのう……」
「返事は今すぐじゃなくてもイイ。それに……見つけられないかもしれないしな」
少し、胸騒ぎがする。
本当に見つけられるのか？
光人は自信を持てなかった。
「とりあえず現時点でのあんたの見立ては？」
「妾を殺そうとしたのは、実はヴァルハラの生徒ではない」
「ほう？」
「あの生徒は操られておったのじゃ」
「この男にか？」
光人は先ほどの写真をルイーゼに向ける。
「実際はもう少し複雑じゃ。賢者の義では賢者になる者に剣を授けるのじゃが、いつの間にか知能を持った剣、インテリジェンス・ソードにすり替えられておったのじゃ」
「インテリジェンス・ソード……」
光人はなんとなく瑠璃火の刀へ視線を送った。
「妾を暗殺するという強い意志を持った剣にな」
「その剣が生徒を支配し、あんたに切りつけた？」
「そうじゃ。じゃが妾はとっさには剣が犯人だとは気付けなかったのじゃ」
「で、生徒に反撃したと」
「勝てぬとみて、テレポートで逃げおった」

「まじか……」
「残念ながら生徒は妾の反撃により命を失った。もし、この写真の男が暗殺の首謀者であるなら、そのインテリジェンス・ソードを回収して逃走中のはずじゃ」
「生徒の死体は上がったのか？」
「はい」
　すると瑠璃火が頷くと、少し俯いて悲しそうな表情をした。
「今朝方、検視に立ち会いました」
「なら、やすらもこのことは知ってるんだな？」
「ええ、インテリジェンス・ソードのことは私から説明いたしました。ですが、この高木氏については、まだ……」
「妾が面会できなかったからのう……妾の事情聴取はこれからじゃ。無論、この男のことは隠さず警察にも話すつもりじゃ」
「なるほど」

　光人はそれからしばらく考えた。
　この事件に関わるつもりはなかったのだが、恋人であるやすらはすでに捜査する側として関わっている。そしてルイーゼ本人からこの事件に関する依頼がきた。
　どうも逃げられそうにない。
「剣がすり替えられていることには、気付かなかったのか？」
　光人は事件についてもう少し踏み込んでみた。
「残念ながら……この手にしたというのに……まったく解らなかったのじゃ」
　ルイーゼは残念そうに首を左右に振るが、内心、油断があったことは認めた。
「それは姿形も同じだったのか？」
「う……」
　その質問に対して、ルイーゼが一瞬怯んだ。
「？」
　光人が首をかしげる。

「賢者の義で使われる剣がどんな剣かは、妾は見ておらんのじゃ……」
選定は確かにルイーゼがおこなった。
しかしヴァルハラ政経塾が持つたくさんの宝物(ほうもつ)の中から適当なものを選んだだけで、その出自(しゅつじ)も見た目も確認したわけではなかった。目録の中からコレというものを選んだだけだったのだ。
そこから先は例の男、高木翔吾の仕事だった。ヴァルハラ政経塾の宝物殿からルイーゼに指定された剣を受け取り、ヴァルハラ政経塾へと運んだのだ。つまりルイーゼはあの賢者の義で初めて剣を見たのである。
「その剣が、あんたの命を狙ったのか？」
「賢者の義で使う予定だった剣は講堂の舞台裏から見つかっておる。瑠璃火が物証として警察に渡したから、おそらく朝日奈の元に届いておるはずじゃ」
「なるほどな。ということはインテリジェンス・ソードは高木が持ち込んだのか」
「現時点ではそういうことになるのう」
「もう一つ疑問がある。この高木翔吾は賢者じゃないんだろ？ インテリジェンス・ソードに触れたら乗っ取られるんじゃないのか？」
「うむ、本来ならば剣に乗っ取られるか、取り殺されて終わりじゃ。じゃが剣と高木が共犯と言うこともありうるし、端から乗っ取られておった可能性もある。そしてこれは万が一の確率ではあるが、高木の知能が剣よりも高ければ、逆に剣を制御下に置くことが出来るはずじゃ」
インテリジェンス・ソードを手にしたその時、手にした者と剣との知能による戦いが始まる。より高い知能を持った者が、相手を御することが出来る。
「へー……」
光人はいったん、インテリジェンス・ソードの特性を整理した。
インテリジェンス・ソードを手にしたら、そのソー

ドに操られるか取り殺される。しかしソードよりも高い知能を有していれば、逆にソードを御することが出来る、と言うことのようだ。
「さらにじゃ、インテリジェンス・ソードに操られておったとしても、その手から離れれば乗っ取りは終了するはずじゃ」
「へー」
「じゃから高木がたとえ剣に支配されておったとしても、剣を手放した時、剣のコントロールから逃れられたはずなのじゃ。いや、もとより、剣を手放せると言うことは支配されてないとも言えるのじゃ！」
「だから、共犯説が濃厚ってことか……」
「妾の見立てでは、のう。もしくは剣に脅迫されておって、自我を取り戻しても剣に従わざるを得なかったか、あまりのことの重大さに恐れて、逃げてしまったのかもしれぬ」
そのルイーゼの声は、自信はあまりなさそうだった。

一通りルイーゼの話を聞いた光人は、もう一つ気になることがあった。
都知事のことだった。
東京を日本から独立させようとしているらしい。
その日本の守護者とも言うべき賢者が、暗殺されそうになった。
偶然か。それとも誰かが糸を引いているのか。
「他に何か感じたり気付いたりした事は無いのか？」
もしこの東京で何かが進行しているとしたら、守護者であるルイーゼが何も感じないなんてことはあり得ない。
「何か……じゃと？」
「この東京にいて、何か感じる事は無いのか？」
「妾にそんな能力は無い」
「そうじゃない、ちょうどそう、その高木という男のように、不審な動きをする人物が他にもいるとか、マークすべき人間がいるとか」

「ふむ……何か思い当たるフシでもあるのか？」
「いや、なければいいんだ。ただあんたの命を狙うなんてことは、誰も考えてこなかっただろうし、実現するとも思われてこなかっただろ？」
「何を言うか、妾とて人間じゃ、この命も永遠ではないぞ？」
「けど普通の人間は、あんたが死ぬなんて思ってもないはずさ。もしあんたが死ぬこともあり得ると知ってこの事件を起こしたのなら、絵を描いているのが賢者なのは間違いない」
「じゃろうな……」
「だが例え賢者でもおいそれとあんたには手を出せなかったはずだ。永きにわたり、この日本に君臨し続けていることが何よりもの証拠だ」
「何が言いたいのじゃ？」
「つまりだ、この計画は、周到に計画されていたんじゃないかってこと。そして実行に至るには、それなりの時間がかかったんじゃないかと思うんだ」
「……」
「前兆をどこかで掴めていた可能性がある。だから何か感じる事は無いかと聞いてみたんだ」
「確かにお主の言うとおりじゃ。妾が油断しておったと言われれば、それまでかも知れぬ。そして、まだ終わってはおらぬということか……」
「そう、果たして本当にあんたの命が目的だったのかどうかも、解らない」
「なっ…！」
「欠員が出来たままなんだろ？ 賢者の」
「光人さん……」
黙って聞いていた瑠璃火が、不意に声を上げる。
それだけ賢者の欠員のことはルイーゼたちには神経質な問題だったようだ。
「本来なら、事件のあの日、ヴァルハラ政経塾の卒業生が賢者になる予定だった」

「むぅ……」
ルイーゼも悔しそうに俯いた。
「生徒をあんたに殺させるところまで考えられていたのだとしたら……」
「これからが本番ということじゃな?」
「そうだ。俺は、そう思う。この高木という男だけで起こした事件じゃない。首謀者は別にいるだろうし、当然賢者だろう」
「じゃが、今は其奴が一番の手がかりでのう……」
「なるほど……」
「糸口そのものを探るところから始めなければならぬ。そして暴かねばならん、首謀者とその目的をな」
ルイーゼは真剣な眼差しを光人に向けると、大きく頷く。その目はまるで獲物を見つめるような残忍さを秘めているように光人には見えた。
「報復は、するのか?」
何となく聞いてみる。
「必要ならば、のう」
するとルイーゼの表情は薄笑みに変わると、ぷいっとそっぽを向いてしまった。

＊　＊　＊

病院から外に出たときには、時間は二〇時を回っていた。今から帰ると二一時を回るな……と思いながらバスを待つ。
「けっこう遅くなってしまいましたね……」
見送りに出てくれた瑠璃火が、少しはにかんで光人を見上げた。
「仕事の依頼なんだから、別に問題ないさ」
それにルイーゼが依頼主となれば、経済面では当分心配しないで済みそうだ。
「ルイーゼ様にかかった呪いの浄化は、たぶん一週間もすれば終わるでしょう」

「そうしたら左腕も復活するか」
「はい」
「報復劇が始まるのか？」
「あの方は、そういう方では……けれど、けじめは必要だと思います。このようなことを二度と起こさせないために」
「なるほどな……犯人の目星は？」
「ハッキリとはまだ……ただ光人さんは賢者が関わってるとおっしゃってましたけど……」
「違うのか？」
「あの方は最近漏らしていたことがあるんです」
「なんて？」
「この世界に、長くいすぎたのかもしれないって」
「……」
　ルイーゼの正確な年齢は、実は光人もよく知らなかった。一〇〇年以上経っていることは解っている。
「そうだな……」
　光人は静かに肯定した。
「そういうものでしょうか？」
「確かにあの地位に、長くいすぎたのかもしれない」
「どういうことです？」
「引退するか、それとも……」
「それとも？」
「さらに高みに登るか……」
「高みに……」
「けど彼女をあの地位に留め続けたのは彼女の意思だけじゃないだろ？ 多くの人間が望んだことでもある」
　一〇〇年以上という歴史の中で、財界・政界から憎まれもしただろうが、便利な存在でもあったはずだ。どんなことでも彼女に押し付ければ何らかの解決はしてくれたからだ。大魔法使いはこの国の様々な危機を救ってきたし、導いてきた。それは間違いない。
　戦後もずっとこの国を影で支えてきた。
　その実績があるから、誰も彼女がいなくなるなど考

えもしなかったのだろう。
「この事件の結末は、ひょっとしたらルイーゼの思いにかかっているのかもしれないな……」
「え？」
瑠璃火がいぶかしげに眉をひそめた。
「彼女が今の地位に留まりたければ、事件は解決されるだろう。だが彼女がこの地位から退きたいと思っているなら……事件はもっとエスカレートするかもしれない」
「光人さんには、そう見えるのですね……」
「そっちは何を掴んでいる？」
「与党内で不穏な動きが……特に先鋭的な右派がルイーゼ様を排除しようと動いていることは把握しています、そしてそれに首相が絡んでいることも」
「なるほど、政治的にルイーゼを今の立場から排除するつもりか……」
「政界・財界がルイーゼ様の存在を望まないのであれば……退くしかないのかもしれません」
「しかし政の世界はルイーゼ自身で何とかして貰うしかないな……俺にもやすらにも手が届かない領域だ」
「そうですね……」
瑠璃火も自信なさそうに俯いた。
「お、バスが来たみたいだ」
吉祥寺駅行きのバスが交差点を曲がってこちらに向かってくるのを光人は見つけた。
「ルイーゼを支えてやってくれ」
光人は瑠璃火の肩を叩くと、真剣な眼差しを向けた。
「は、はい」
その光人の表情に、瑠璃火は戸惑ったようだった。
「この街で何かが起きようとしている、それは間違いない」
それが良いことなのか、悪いことなのかもまだ解らないが、ルイーゼがキーマンなのは確かだ。
「光人さん……」

瑠璃火は何かを聞きたそうだったが、バスが来てしまった。
「何か解ったことがあったら連絡する」
光人は早口でそう言うとバスに乗り込んでしまった。
瑠璃火は何か言いたそうに去りゆくバスを少しだけ追うと、バスが消えるまで立ちすくんでいた。
光人はそんな瑠璃火の思いをよそに、これから何が起きうるのかということを考えた。
光人の元に集まりつつある情報は何かを予感させるような気配はあるものの、何が起こるかはイマイチ掴めなかった。
『やすらも何か掴んでいるかも知れない……』
光人はいったん考えるのをやめ、彼女が集めた情報も知る必要があると考えた。
ちょうど時間も遅いし、どこかで食事をしながら話せればと思ってメールしたが、やすらの返事は光人の手料理を食わせろという内容だった。
めんどくさいなぁ……。
と思いながらも、光人の思考は冷蔵庫に残っている食材に移っていった。
そして神保町についたのは、二一時を回っていた。
先にやすらが家に帰っていたら、さぞかし腹を空かせているに違いないなどと思いながら、家路を急ぐ。
だが、しばらく歩くと自分の後をつけている存在に、光人は気付いた。
「……」
ふと立ち止まる。
そして振り返る。
当然だが誰もいない。
光人は再び歩き出すと、そのまま素直に自分の家に向かった。
「イラッシャイマセ……」
門をくぐり人感センサーの範囲内に入ると、レディが話しかけてくる。

そこで光人は再び後ろを振り返った。
すると今度は人がいた。
女性が一人、たたずんでいたのだ。年の頃は三〇代後半ぐらいに見える。
ぼうっとまるで浮かんでいるかのように、道ばたに立っている。
その表情は、光人を睨んでいるようにも見えた。
「ようこそ、天野探偵事務所へ」
光人はその女性に微笑みかけた。
だが相手の女性は特に何の反応も示さなかった。
この世のものでないことは一目瞭然だった。おそらく光人にしか見えていないだろう。そして、敵意を持っていることに光人は気付いた。
「依頼ですか？ 今日は喫茶店は休みですが、依頼なら年中無休二四時間営業ですよ」
ただ黙っている女性に、光人は言葉を続けた。
そして、店の中に入るよう右手で店内へと案内した。

しかし女性の姿勢は、特に変わらなかった。
光人は微動だにしない女性を改めて観察してみた。時代がそうとう古い存在であることが、その服装から推察できる。
通常ならとっくに魂はなくなっていてもおかしくないくらい古いものだ。
「俺に、用があるのではないのかな？」
光人は腕を組んだ。
「ここだと人目がある。俺が一人でしゃべってると、ただのおかしい人に見えてしまうんだが……」
目の前の女性は光人にしか見えないから、店の前を通る人からみたら、光人が一人で見えない誰かに話しかけていることになってしまう。
すると女性は状況を理解したのか、すーっと歩き出し、光人の前を通って店の中に入っていった。
彼女は店に入るとぐるーっと辺りを見渡して、それから光人を振り返った。

「そこの椅子に座って。いくらなんでも、今という時代が解らないわけじゃないだろう？」
光人はそう言いながら、彼女を追い越し、奥にあるテーブル席の椅子を引いた。
するとその女性はすーっと流れるように移動して、そしてその椅子に座る。
それからゆっくりと光人を見上げた。
光人もその女性に向き合って座る。
とはいえ端から見たら、座っているのは光人だけだ。
「正直、魂から金は取れないから乗り気はしないが、さまよえる魂を導くのも俺の勤めだ。用件は？」
しかし彼女はじっと光人を見つめるだけだった。
いや、見つめているだけではない、と光人はすぐに気付いた。どうやら霊的な品定めをしているようだ。はて、彼女には自分がどのように見えるだろうか？
ちゃんと自分の正体に気付いてくれるだろうか？
もし、自分の正体に気付けるなら、彼女は自分から離れるか逃げるかするはずだ。
それを願ったが……。
「……」
女性は椅子から立ち上がると、目を見開いてそのままテーブルをすっ飛ばして光人に取り憑こうとした。
やれやれ……そんなこと出来はしないのにと光人は思いながらも、霊そのものの動きを止めようとした。
が……。
「ほう……」
何か大きな力に守られてはいるようだった。
めんどくさいな。
と、目前に迫ってくる霊に次の手を打とうとした瞬間、光人の後ろから何かが飛びだしてきた。光人の髪と同じ、白銀の何か。
それは大きな狼だった。
「!!」
狼は女が驚いて仰け反るその首に食らいつくと、一

気に床に女をたたきつけた。
女の驚きと無念さの入り交じった表情。
それが次第に恐怖に変わって行くが……変わりきる前に狼に喉を噛み砕かれて、絶命した。
いや、もとから命は亡いから絶命はおかしいのだが。
女の姿が消えていく。
慌てて光人は魂を捉えようとしたのだが、余りにも弱くて捉えることが出来なかった。
ただ、床には勾玉(まがたま)が一つ、残された。
狼がクンクンとその臭いをかいだあと咥(くわ)えると、やすらの掌に落とした。そう、狼だけでなくやすらも戻ってきていたのだった。
「なにこれ？」
やすらが首をかしげる。
「どうやらこれに取り憑いていた霊みたいだな」
光人はそれをつまむと、電灯に透かしてみた。
表面はとてもキレイに磨(みが)かれており、材質は何かの宝石のようだった。なかなかのサイズで、自分の親指ほどもある実に見事な勾玉だ。そして勾玉の首飾りを都知事がしていたのを光人は思い出した。
もし都知事のものなら、さっきの霊はＴＶ局からずっと光人のあとをつけていたことになる。
「なるほどな」
都知事の勾玉の首飾りには、いくつの勾玉があっただろうか？
光人は知事と握手したときのことを思い出した。
「なんか解ったの？」
「ん？ 持ち主にはなんとなく心当たりがある」
「へー」
「まぁ、あとでじっくり調べよう」
光人は狼の意見も聞いてみようと、掌にのせて狼の前に差し出してみた。
「……」
彼はその臭いを嗅いでみるが、特にこれと言った反

応は示さなかった。
「ま、おまえは日本育ちじゃないものな……」
光人がそういうと、狼も相づちを返した。
「っと、改めて、天野光人だ、よろしく」
光人は狼の前に片膝をつくと、丁寧に挨拶をした。
すると狼は少し驚いた表情をしてから、頭を一度垂れると、光人の膝に身体をすり寄せた。
「フレキって言うの。伝説の狼だし、魔も使えるし、今回の件で協力してもらう事にしたわ」
やすらが少し得意気にフレキを撫でた。
「それは心強い助っ人だな」
オーディン配下の狼が、なぜこんな東の果てにいるのかというと、簡単に言えば北欧文化がキリスト教に敗北したからである。キリスト教の大弾圧を経て、彼らは世界中に散らされたり、人間に仕えるようになったりしたらしい。
そしてそんな彼らの一部を受け入れたのがホラント家だった。ヴァルハラ政経塾という名前は、そう言った経緯でつけられた。あの学校の運営には多くの北欧出身の神々が関わっているらしい。
だからフレキはルイーゼに仕える身ではあるが、元を辿るとカトリック教徒であるルイーゼとは対立していたことになる。
「大変だったのよ、許可とるの」
動物を捜査のパートナーとして申請するにはそれなりの手続きが必要なようだった。
「警察犬ってことにすればよかったんじゃないか？ もちろん、フレキのプライドによってしまうが」
「承服しかねる」
するとフレキはフンと鼻を鳴らした。
「それは失礼した」
「あー、もうお腹ペコペコー！」
やすらはまた物騒なモノをフロアにほっぽり出し始める。

「とりあえず着替えてこい。その間に準備するから」
「はーい」
素直なやすらの返事。
「フレキは何が食べたい？ といっても……お前向きの食材は少ないが……」
そう言いながら光人は狼をキッチンへと案内した。
彼は人と同じものは食べられるが、生肉があるならそれがよいと答えた。
「やはりお前に炭水化物は似合わないか」
光人は苦笑しながら本来は客に出すためのグリル用の大きな肉の塊を取り出した。

＊　＊　＊

二人と一頭は夕食をとりながら、それぞれが持つ情報を付き合わせた。
たしかに狼がいたのでは飲食店に入れなかったかと、やすらがただワガママで外で食べることを拒否したわけではないことを光人は知った。
この日、光人とやすらが集めた情報はあらかた一致していた。また、狼はまさに事件の真っ只中にいた貴重な目撃者であった。
彼は目の前で起こった惨劇をつぶさに二人に語った。
ルイーゼが卒業生の肩に剣を当て、儀式の言葉を述べる。それからその言葉に誓いを立てるべく卒業生が剣を受け取り、高く掲げる。
その時にブラインドネスの暗黒の光が講堂内に広がった。
光は一瞬だが、その光を見たほとんどの生徒が失明。抵抗できたのは一部の教員と力あるルイーゼや狼たち。
反撃するルイーゼ、粉砕される卒業生。しかし彼は剣を手放すことはなかった。
「ルイーゼ様からあふれ出た血の飛沫に触れ、呪われていることに気付いたのだ」

狼は目を細め、悔しそうな表情を滲ませた。
狼の警告も空しく、ルイーゼからあふれ出た不浄な血によって、塾長と駆けつけた消防隊員、そして鑑識が亡くなった。
ルイーゼと塾長を失った講堂内の秩序を取り戻したのは、狼たちと失明を免れた教員たちであることも解った。この教員たちはいずれもすでに公安六課の事情聴取を受けている。
「ま、失明しなかった教員って、要はワルキューレとかなんだけどね」
やすらがぼそりとつぶやく。そりゃ失明しなくても当然だわと言いたいらしい。
「まじ⁉ つーか、ワルキューレって実在するのか！」
「何驚いてるのよ！ 目の前にしゃべる狼がいるのに……」
「それもそうだった。つまりヴァルハラ政経塾ってのは、まさに名前の通りの学校なんだな……」

「だてに『ヴァルハラ』なんて名前がついてるわけじゃないの。そしてそれを擁するルイーゼのパワーは絶大よ！」
マルタ騎士団はすでにルイーゼが何人のワルキューレを従えているかも把握していた。ルイーゼに協力する北欧の神々の数も。
「ルイーゼの東京を守護する力の源は、ほぼヴァルハラ政経塾が担っているといっていいと思う」
おそらく一国の軍隊にも匹敵するだろうし、やすらが率いる警視庁公安六課よりも遥かに強力な組織だ。
「たぶん今回の報復も、影でヴァルハラ政経塾が粛々と進めていくんじゃないかしら」
そう言いながらやすらは狼をチラ見する。
「……」
しかし、狼はただ黙って目を細めただけだった。
それにしてもそれだけの力を持ちながら暗殺されそうになるなんて、おかしな話だと光人は首をかしげた。

「そうだフレキ、この男を知ってるか？」
光人はおもむろに写真を取り出して、狼に見せた。ルイーゼから預かった、高木翔吾の写真だ。
すると狼は深く頷いた。
「学校行事の部材調達の仕切りを担当していた男だ。卒業式の時は教員席に座っていたが、賢者の義の時に席を立って、それっきり見ていない」
「やはり彼が剣を差し替えたのか……？」
「この男とは塾では共にいたが、悪意を感じる事は無かった。いけ好かないヤツだとは思ったがな……」
「いけ好かないか。どんな印象だった？」
「ナルシスト、そして自信家に見えた。だが強い信念は持っていたようだ。ヴァルハラ政経塾を通して日本の未来を変えたいと常日頃から熱く語っていたのを憶えている」
「日本の未来？」
「財務省にいた頃、くだらん派閥争いに巻き込まれたと聞く。腐敗していく同僚や上司に、日本の凋落を感じたらしい。正義感の強い人間だったようだ」
「なるほど……」
ステレオタイプな熱血漢だなと光人は内心苦笑した。
「もしくは彼なりの理想像があったかもしれん。ヴァルハラ政経塾の理念に賛同し、事務でもイイから雇って欲しいと門を叩いたと聞く」
「へー」
「仕事には決して満足はしていなかったようだが、ヴァルハラ政経塾で育っていく生徒たちには、日本を変えるだけの力があると確信していたようだ」
「ヴァルハラの卒業生なら、未来を変えられると？」
「そう思っていたようだな」
「なるほど」
もし賢者の持つ力をこの男が知ったら、賢者になることを望んだかもしれないなと光人は感じた。
「せめて彼の所持品でも残っていれば……」

「ヴァルハラ政経塾の彼の席に私物が残ってたりしないかしら？」
　するとやすらが、口を挟む。
「その手があったか。ボールペンか何か、彼が使っていたものに触れさせてさえくれればいいんだ」
「でも、そいつって容疑者なの？」
「それを決めるのはお前だろ」
「なによー、だってそんな怪しそうな男がいるって、あたし知らないし！」
「俺の方が先にルイーゼに会えてしまったからな」
「あたしの時は面会謝絶で追い返されたわ」
　おそらく公安六課が問い合わせた時点では、ルイーゼの症状がひどかったのだろう。腕どころか左肺もやられてたはずだ。そして身体中には強力な呪いのかかった血が巡っていたのだ。
　それが今日にもあれだけピンピンしているのだから、やはり賢者とは恐ろしい存在である。

「どうせ、明日事情聴取するんだろ？」
「もっちろんよ！ 知ってることはぜんぶ話してもらうんだから！」
　やすらは鼻息を荒くする。
　当の被害者だ。暗殺されるような心アタリもあるだろうとやすらは期待した。
「そういえばさ、すげー今さらな質問なんだけどさ」
　光人の分のパスタまで平らげているやすらに、光人は素朴な疑問を投げかける。
「なに？」
「ルイーゼの今の地位って、なんだろ？」
　そもそもルイーゼは国会議員でもないし、閣僚でもないし、また経団連とかの会長でもなければ、大企業の社長でもない。
　一応、彼女が生まれ育った町の市長もやってはいるが、あれも名誉職であって、法的に具体的な権力は何一つ持っていない。

「ルイーゼは社長だか会長ではあるはずよ。ホラント家は銀行業とか不動産業とかやってるし……あ、あとリゾート開発とか」
「あぁ、資本家ではあるのか」
「それよりも、ルイーゼにはもっと重要な役目があるって、今日マルタで聞いてきたわ」
「へー、なんだ？」
「日本って軍隊って一応ないじゃない？ 建前では」
「お、おう、まぁそうだな」
予想もしなかった答に、光人はすこし驚いた。
「そういえば、同じ敗戦国のドイツは軍隊を持っているのにな」
「国体を維持することを選んだからなんだって。国体ってなんぞやー！ って聞いたら、要するに天皇制をやめずに国家元首はそのままだから、軍隊を持つことは国際的に認められません！ ってことらしいわ」
「だから日本の国防のためにアメリカ軍が駐留しているわけか」
「みたい」
「で、それとルイーゼになんの関係があるんだ？」
「ルイーゼはね、それの賢者版なんだってさ」
「あー、そういうことか！」
「この日本を賢者から守る、と同時に、この国がまた侵略の道に進んでないか監視する役目も負ってるんだって」
「へー、それは知らなかったな。アメリカは自分所の賢者を日本に置いたわけじゃなかったんだな」
「スピーディに占領下の混乱を終熄させるために、日本国内で利用できるものはなんでも利用しようとしたらしいわ。あの時は冷戦が始まってたっぽいし」
「つまり、ルイーゼは今の地位から引くことは簡単には出来ないってことか……」
「自分の意思では無理みたい。後継者を立てないことには……」

「後継者か……」
ルイーゼの後を継げる賢者など、なかなかいないだろうなと光人は何となく思った。
同時になりたがる者も……。
「ヴァルハラ政経塾って、ルイーゼの後継者を育てる目的もあるのかもしれないわよね！」
ふとやすらが人差し指を立ててそんなことを言う。
「確かにあの学び舎の真の存在意義は、そこだな？」
優秀な人間を集めるための学校。
ルイーゼ自らが生徒を品定めし、確実に務まる人間を探し出す。
もし後継者にふさわしい人物が現れれば、ヴァルハラ政経塾も、そしてルイーゼの地位も、全て譲る気でいるのだろう。
「あと、ルイーゼに喧嘩を売るって事はさ」
「うん？」
「アメリカにも喧嘩売るってことにならない？」

「あー、うーん、それはどうなんだろうな……」
戦後のルイーゼの立場が成立する経緯を考えると、そうなるのかもしれないが……そのことを憶えている人間はどれほどいるだろうか？
今やアメリカ大統領が日本の国防は自分たちで担えと言い出しているようだし……。
「世界は常に変わり続けているからな……」
「なによ？」
「今のルイーゼの立場もまた、その意義は変わってしまっているのかもしれない」
この日本を賢者から守る。
その必要は、今でもあるのだろうか？
そもそも日本にルイーゼのような存在は、必要なのだろうか？
「なんか釈然としない言い方ね」
やすらは納得がいかないようだった。
「実は瑠璃火から聞いたんだが、ルイーゼは今の立場

に長くいすぎていることを気にしているらしいんだ」
「へー」
「今回の事件は、多分にルイーゼの油断が引き金になっていると俺は思ってて……」
「油断？」
「今の立場に居続けることを、彼女は負い目に感じている。だから彼女の身辺が物騒になっていても、そのことを見過ごしたんじゃないかと思ってね」
自らを殺そうと画策していたインテリジェント・ソードを握っても、ルイーゼはその剣の悪意に気付くことはなかった。
さらに自分の生徒が操られていることにも頭が回らず、生徒を殺害してしまった。
もっと遡れば、あの事件が起きるまでルイーゼを取り巻く環境はいろいろ変わっていたはずだ。ルイーゼを暗殺しようとしたらそれこそヴァルハラ政経塾内部に協力者が必要なはずで、となれば必ずどこかで尻尾を掴めたはずなのだ。だが、暗殺は実行された。
彼女らしからぬ失態である。
しかし彼女が今の立場に迷いを抱いているなら……。
「ルイーゼが何歳の頃からあの立場にいるのか解らないけど……人間にとっては長すぎるわよね。あたしだったら、絶対飽きるわー」
「だから瑠璃火にも話したんだけど、この事件はルイーゼの気持ちにかかってると俺は思ってるんだ」
「気持ち？」
「今の立場を維持する気があるのか。心に迷いはないのか……」
「もし迷ってるなら……事件はエスカレートするってこと？」
「ああ。荒れる要素は揃いつつある」
そう言って、今度は光人が抱えるもう一つの話をやすらに伝えた。
都知事が東京の独立を目指しているという、アレだ。

その話を聞いたやすらは豆鉄砲を食らったような顔をした。目が点状態である。いや、それが正しい反応だよなと光人も内心苦笑する。
「だが、どうもこの件も無視は出来ないということは解った」
納得できないやすらに、光人は真剣な眼差しを向けると、先ほどの勾玉をテーブルの上に転がした。
「どゆこと？」
それをやすらが首をかしげながらつまみ上げる。
「その勾玉は、都知事がしていた首飾りの一つさ」
「え!?」
「知事は八つの勾玉が連なった首飾りをしていたんだ。それがマジック・アイテムだというのは見てすぐに解ったんだが……」
一つ一つに霊が取り憑いている可能性があった。
「そのうちの一つが、光人に乗り移ろうとした？」
「宣戦布告と言っても、いいんじゃないかな」
光人は薄笑みを浮かべる。
「光人の正体に気付いたって事？」
「それはないだろう。気付いていたら、そもそも俺に取り憑けないことも解るはずだ」
「あー、そっか」
「俺がなんか他の人間とは違うってことには気づけたんだろうけどな」
そしてそのうちの一人が光人のあとを着いてきた、というのが妥当な推理だろう。
「問題なのは、さっきの霊の行動が知事の意思なのか、それとも霊自身の意思なのか。もし霊の意思だとしたら、知事は……」
「取り憑かれてるって事ね」
「まぁ、そうなるだろうな」
そしてその方が、東京を独立させることと辻褄は合うような気がした。
「そしてルイーゼが暗殺されそうになったのね……」

やすらも真剣な表情になると腕を組んだ。
「ほら、関係してそうだろ？」
「そうね……」
やすらも同意せざるを得なかった。
「これは極論なんだけど、もしかしてルイーゼは死にたがっているとかないかな……」
「どういうこと？」
「いや、それは俺の勘ぐり過ぎかもしれないんだが」
この世界に長くいすぎたというルイーゼのそのつぶやきが、今の立場から逃れたいと思う気持ちの表れなのだとしたら、後継者が育っていない今、強制的に代替わりするにはルイーゼが死ねばよい
ルイーゼが死ねば、否が応でも誰かがその後を継がなければならなくなる。
それに、もしかしたら実はルイーゼの立場というものはもうこの日本には必要ないのかもしれない。しかしそれもルイーゼが退いてみなければ解らないことだ。

「とにかく、何かが揃いつつはあるんだ」
光人は顎に手を屋って、深く頷く。
「光人には何かが見えるの？」
やすらがキョトンとする。
「ルイーゼを暗殺しようとした剣は、目下逃走中」
「うん」
「ルイーゼを邪魔だと思っている勢力もいる」
「うんうん」
「しかも、ヴァルハラ政経塾の卒業生が死んだことで、賢者の空きが出来ている」
「うんうんうん」
「さらに東京を独立させようとしている勢力もいる」
「なんかそう聞くと、やっぱり東京の話だけすっごい非現実的に聞こえるわー」
「ま、まぁな……」
光人も苦笑する。
「だが影響はあると思う。ルイーゼがいない方が、東

京は独立させやすいだろうしな」
「そうだとしても、都民や国民が納得しないと思うんだけど……たとえば普段から都民が国政に不満を持って、東京都は独立すべきなんて世論だったら解らなくもないんだけど……」
「独立したら何がよくなるかも解らないしな……」
二階堂は独立の理由は説明してくれなかった。
イヤ待てよ……そもそも独立する理由など、実は明確ではないのかもしれない。
「なにか解ったの？」
「理由なんてあとからでもいい、独立せざるを得ない状況を作る……とか？」
「それってどういう状況？」
「解らん」
「あのねー！」
「本当にたまたま同時に起こっただけかもしれないしな、どちらにせよ、まだ情報不足だよ」

光人はそういうと、目を閉じてゆっくりと首を左右に振った。
ただここまでの情報が自分に集まったことは、偶然ではないだろう。
だから、これから何かが起きる。
それが良いことなのか、悪いことなのか。
いや、善し悪しの基準は立場によって異なるものだ。
これから起きることが、誰にとって良いことで、誰にとって悪いことなのか。
それを見極める必要があると光人は感じていた。

＊　＊　＊

賢者とは、人間の能力を遥かに超え、超自然的な力や、古の失われた力を手に入れた人間のことである。
かつては冒険者とも呼ばれ、古代から中世を席巻した。

英雄として。
為政者として。
探究者として。
救済者として。
人の力を遥かに超えた彼らは、裏の世界でも表の世界でもその名を歴史に留めた。
近代に入って社会と科学が進むにつれ、国王や騎士がその存在意義を失っていったのと同じように、冒険者もまた徐々に姿を消していった。
しかしそれは彼らがいなくなったのではなく、社会の変化と共に彼らの役割も変わっていっただけのことである。古代の力を受け継ぎ、かつての魔の力に彩られ、人間を超越した彼らは、あるいは学者に、あるいは資本家に、あるいは政治家に……社会を構成する様々な分野に溶け込んでいった。
そして往々にしてその国に存在する賢者の数と、その国の盛衰は関係していることが多い。賢者を多く抱える国は繁栄し、賢者を失った国は衰退するというわけである。
ルイーゼ・アンナ・フォン・ホラントは表舞台に立つ数少ない賢者の一人である。明治時代から存在し続け、長寿であることを隠すこともしていない。
多くの人間はルイーゼを不思議な存在だと思うはずだが、それを魔の力で逸らしているというのは、賢者たちの知るところであった。
戦前は財閥の一翼としてこの日本を列強に比肩(ひけん)するほどの経済大国へと押しやった立役者の一人で、日本の近代化に貢献した一人でもある。
戦後は自身が生まれた街の名誉市長となり、静かにこの国を見守ってきた。積極的な活動はせず、ヴァルハラ政経塾で後進を育てることに精を注いだ。
「はぁ……」
一通りルイーゼの資料に目を通したやすらは、諦めのこもったため息をついた。

それから自分の前に座る公安六課の面々を見つめた。
総勢一〇数名。
彼らはこのブリーフィング ルームで神妙な顔つきでやすらに視線を向けていた。やすら直属の部下で有り、やすらが使える手駒である。
警視庁公安部第六課は五つの係からなり、総人数は二〇〇名を超える警視庁の課の中ではそこそこ大きな組織である。やすらはその頂点に位置するが、実際に指揮するのはここにいる一〇数名である。
「まさか、賢者を相手にしなくちゃいけなくなるとはねー……」
公安六課始まって以来の……かどうかはわからないが、少なくともやすらが六課の課長に就いてからは初めての事態である。
もちろん公安六課が超常現象に対応する部署であることは間違いない。
それに応じたエキスパートも揃っている。

しかし賢者が相手となると話は別である。
そもそも公安六課に賢者は一人もいない。さらに言えば、日本の警察に賢者を処理する能力は皆無だ。一番弱い賢者の強さを一〇とすると、公安六課の面々は〇～七くらいだというのがやすらの見解だった。
本来、賢者が絡む事件は賢者同士で片付けられ、秘密裏に処理される。警察が関わることは無いのだ。
だが今回は事情が違った。
多くの人の前でルイーゼの暗殺は実行されたからだ。一般生徒、そしてその父兄たちが犠牲になり、さらには消防と警察関係者も死亡した。マスコミの目に触れることになってしまったし、ヴァルハラ政経塾も記者会見などの情報開示が必要となってしまった。
こうなってしまっては、当然警察が関与せざるを得ない。警視庁は渋々、捜査本部を設置したのだという。
とはいえ、表向きはこの事件は解決したと公表されるだろう。事件は実行犯の自殺もしくはルイーゼの正

当防衛という形で幕引きを行い、警察としてはこの事件をさっさと風化させたいに違いない。
これで世間の目はごまかせたとしても、正体不明の強力な剣がこの世に放たれてしまった事実は消えない。引き続き、この剣の調査はする必要があるし、そのためには暗殺事件そのものの捜査も必要となる。
この事件に関わることは、公安六課の面々の命を危険にさらすことにもなる。
やすらのため息はそうした憂慮でのものだった。
瑠璃火の言葉がやすらの脳裏を横切る。
『賢者のことは賢者に』
この事件も賢者にまかせてしまえればよかったのにと素直に思う。
「課長？」
あまりにも沈黙が長いので、部下の一人がやすらに声をかけた。
「あ……」
やすらが我に返って、みんなの方を向く。
「ぶっちゃけると、ほら、ＲＰＧとかでさ、町の人とかのヒットポイントが五とか一〇とかしかないのに、主人公って九九九九になったりするじゃない？ アレよ、アレ。賢者ってそういう存在のこと」
「はぁ……」
「だからあんたたちは絶対に喧嘩を売っちゃダメよ。勝てっこないから。銃で撃とうが、ナイフでメッタ刺しにしようが、ピンピンしてるのが賢者ってわけ」
「お言葉ですが課長」
「はい、そこ！」
「課長もそうですよね？」
「……」
しまった、黙ってしまった……とやすらは心の中で後悔した。
とはいえ、自分は賢者ではない。じゃぁなんて答えればいいかというと……「天使でーす！」って言った

所で真面目に受け取ってはもらえないだろう。
「そうねぇ……正確に言うとあたしは賢者じゃないんだけど、ヒットポイントが九九九九なのは間違いないかなー」
やすらは苦笑しながらも、自分が特別な存在であることは認めた。
「まずは、方針を二つに絞るわ」
それから先に配っておいた別資料を掲げる。何やら細かい表が書かれてある。
「ヴァルハラ政経塾の捜査と、インテリジェンス・ソードの捜索、これが今回の事件の柱よ」
ルイーゼに気付かれずに暗殺を計画するには、ヴァルハラ政経塾内に手引きした者がいるはずだ。ルイーゼが言う高木翔吾の捜査もするが、一人だけではないだろうとやすらは踏んでいた。
次に都内のどこかに潜伏していると思われれるインテリジェンス・ソードの捜索だ。こちらは地元の警察にも協力してもらう。さらにマルタ騎士団からは、全世界のインテリジェンス・ソードの目録も届いた。
この目録の中から似たような能力を持つ剣を見つけ出し、その所在を確認するのである。
ただやすらは、インテリジェンス・ソードがもう一度ルイーゼを殺しに来ると思っていて、んでもって、その時まで見つけることはできないんじゃないかなぁ……と思っていたりもする。
そういう意味ではルイーゼには囮になってもらえないかと心の中では画策していた。
「いい？ 命を掛けては絶対ダメよ！ けど、この事件は命に関わることに間違いないわ。だから捜査は慎重にね。そのことを肝に銘じておいて」
やすらはそう言うと、一人一人の顔を見つめた。
ただの捜査では終わらない。賢者と関わると言うことは、そういうことだと……やすらは自分自身にもそう言い聞かせた。

Characters 2

月夜野ちあら

この4月に翼と同じクラスに転入してきた生徒。賢者としての力に目覚めたものの賢者としての資格はまだない。

一関翼

ちあらのクラスメイト。いじめに遭ったため、二、三学期と登校拒否になっていた。陸上部でインターハイに出るほどの実力をもっている。

由良萌葱

同じくちあら、翼のクラスメイト。好奇心が強く、また噂好き。お節介焼きでもあるが、憎めないタイプでクラスの中でも人気者。

日下部麗奈

翼の同級生で、お嬢様・文武両道と絵に描いたような完璧な生徒。教師からの評価も高いが、いじめなどを主導するなど裏の顔も持つ。

百花

麗奈の親友。
麗奈と共に翼のいじめに加担している生徒。麗奈に絶大な信頼を寄せているようだ。

三、来た（Veni）、見た（vidi）、混乱した（obfuere）！

新学期――

この日、２－Ａクラスは少しざわついていた。その理由は二つあった。

一つは三学期に登校拒否になった生徒が登校してきたこと。

もう一つは転入生が入ってきたことだ。

私立の中学校に転入生が来ることは、珍しいことだった。

「月夜野（つきよの）、ちあら、です。よろしくお願い…します」

転入生は黒板に自分のフルネームを書くと、クラスのみんなに振り返って、ぺこりと頭を下げた。

背は小さく、一四〇センチそこそこしかない。しかし特徴的なのは何と言ってもその真っ白な髪だろう。

その髪を頭の両横で束ねてある。ツインテールだ。

誰しもが目を疑うほどにその髪に釘付けになる。

しかし瞳は赤くない。

と言うことはアルビノではないようだった。

「月夜野さんは、編入試験をすべて満点でクリアしました！」

担任のその言葉に小さいけれどもどよめきが起こる。

「てれてれ」

なんと答えていいのか解らなかったちあらは、恥ずかしそうに笑った。

パチパチパチと生徒たちの拍手は起きたものの、それはまばらだった。

「席は……あちらの空いている席へ」

「はい」
ちあらは素直に頷くと、すたすたと自分の席へと移動した。
「そして今日はもう一つ嬉しいことがあります」
ちあらが席に着くのを確認してから、担任の先生は両手を組んで、にっこりと笑った。
「一関翼（いちのせきつばさ）さんが登校してきてくださいました」
生徒たちの視線が今度は教室の中程に集まる。
「……」
その視線の先には、なんとも神妙な顔をした生徒が一人。
ショートカットでその顔つきはとても整っていて、可愛さと言うよりはどちらかというと凛々しさを兼ね備えていた。透き通った目と引き締まった口元はとても聡明そうな生徒に見えるものの、その表情は少し不安気だった。
「一関さん、よく登校してきてくれましたね。先生嬉しいです。一緒にがんばりましょうね」
先生は笑顔を絶やさず、そう言葉を続けた。
「はい……」
しかし当の一関と呼ばれた生徒は、うつむき加減で小さくそう答えただけだった。
「さぁ、それではＨＲ（ホームルーム）を始めましょう」
そこからはいつもの時間。
ただ、クラス内は全体的に浮き足立った雰囲気ではある。春休みが明けて今日から学校とは言え、始業式とＨＲしかない。ＨＲが終われば帰れるのだから、あまり学校が始まった実感がないのだろう。
そのＨＲも新学期の連絡事項や一学期にある行事の説明が終わると、すぐに終了となってしまった。
先生が出て行くと、教室中がざわつく。
転入生であるちあらは、数人の生徒に取り囲まれて質問攻めに遭う。どこの中学に行ってたのかとか、満点取ったのは凄いとか、得意な教科はなんだとか、ど

こに住んでいるのかとか。
その黄色い声の塊に、ちあらは圧倒されてしまった。
「えっと……浅草橋の地元の中学校に通ってて……」
たどたどしく自分に用意された設定を思い出す。
得意な教科は古文だが、英語以外ならだいたいできると答える。
好きな食べ物は餅。とにかく、餅。何が何でも、餅。餅以外あり得ない。
パン？　何を言っているんだ、日本人なら米を食え。
めんどくさい？
炊いたら小分けにして冷凍しておけば、ほぼ炊きたての味だ。それに冷えたご飯にも、茶漬けという素晴らしい文化がある……！
と力説しているところで我に返り、女子中学生相手に何を喋ってるんだと、うつむいてしまった。
「月夜野さん、おもしろい」
「お米にそこまで執着ってすごくない？」
「食えればぶっちゃけどっちでもいーし」
変人扱いされはしたものの、クラスメイトの反応はそんなに悪くないようだった。
一方の登校拒否から復帰した翼には、誰も話しかける生徒はいなかった。
しかしほどなくして、一人の生徒が翼に話しかけ、翼を教室から連れ出していくのをちあらは見逃さなかった。
「えっと、美紀さん、萌葱さん、結菜さん、美月さん……」
「一度に憶えるのは大変っしょ？」
「少しずつ慣れてこーよ」
「コク、よろしく」
これから数ヶ月は共に過ごすクラスメイトたちだ。憶えないわけにもいかない。
「あの、ところで一関さんは……」
「え……」

一関の名前を出したところで、あんなにぴーちくぱーちくしゃべっていた子たちが一斉に黙った。
それぞれが顔を見合わせる。
「わけあり？」
「んー、まー、あんまり関わらない方がいいかも？」
一人が浮かない顔をしてそう答えた。
「ふむー……」
ちあらは翼が出て行った扉を、なんとなく見つめた。
一方、同級生に呼び出された翼は、屋上へと連れてこられていた。
そこには数人の生徒が集まっており、翼が姿を現すとニヤついたような、憐れなものを見つめるようなそんな視線を向けた。
俯いたままの翼が、一人の女生徒の前に差し出されるように押し出される。
「来なくなって清々してたのにさ、何来てんの？」
「先生に媚びてんじゃねーよ」
「一緒にがんばりましょーね、だって、キャハハ！」
「あれじゃね？ 家にいたら追い出されたとか？」
「中学生でニートとか、ウケル」
周囲の生徒たちがクスクスを笑いながらそんなことを話している。
翼が三学期に登校拒否になった理由、それはいじめだった。
「私に挨拶もなしに教室に入るなんて、自分の立場がわかってないようね」
うつむく翼の前で偉そうに立っている女生徒が、翼を見下すように見つめた。
「それに春になったらいきなり来るとか、ホントに頭の中が御花畑になってんじゃない？」
そう言って彼女は翼の頭をコンコンと叩いた。
それでも翼はうつむいたままだ。
ただ若干震えているようにも見えた。
「知ってるわよ」

翼が黙っているのをいいことに彼女は言葉を続けた。
「ヨージとは会あってたんですって？」
その言葉に翼がピクッと反応する。
えーとか、まじでーとか言うようなどよめきが周囲から聞こえてくる。
「フフ、せっかくの親から貰った身体が台無しよね。インターハイのために鍛えていたのに……」
その言葉を聞いた途端、本能的に翼の心が動いた。
怒りだったのか。
いや、そんな感情はずっと持っていたし、ここから逃れたいという気持ちも持っていたはずなのに……なぜか翼は強い衝動にかられた。
「キャッ……!?」
翼は真正面の女生徒に飛びかかると、そのまま全体重を乗せて彼女を押し倒した。
あまりの不意の出来事に相手は受け身体勢も取れず、そのままコンクリの床に頭を打ち付けてしまった。

打ち所が悪かったのか一瞬にして彼女の意識が飛ぶ。
だが翼はそんなことはお構いなしだ。その子の頭を髪の毛で持ち上げると、コンクリに打ち付けた。
何度も、何度も。
相手は完全に白目を剥いており、無様(ぶざま)にも口が開きっている。
「いけない……」
か細い声だったけれども、確実に頭に届く声が背後から聞こえた。
「あ……」
そこで初めて我に返る。
我に返って、改めて目の前に広がる光景は……とても信じがたいものだった。
「これ以上やると、死ぬ」
自分の手を誰かがとり、真剣に首を横に振った。
視界に入ってきたのは銀髪の少女。転入生のちあらだった。

「あ……あぁ……」
事態が飲み込めない。いや飲み込めてはいる。自分が何をしてしまったかも。
だが、どうすればいいのか解らない。
「あたしのせいじゃない。あたしのせいじゃ……」
譫言のようにそう繰り返すと、翼は駆け出してしまった。
周囲にいた生徒たちは不安そうな顔でこの状況を見ているだけ。
誰もリーダー格の生徒を助けようとはしなかった、というよりはあまりの状況の遷移に思考がついていけてないようにも見えた。
「せ、先生を呼んでくる」
一人が逃げるように駆け出していく。
それに釣られるかのように、ばたばたと生徒たちもいなくなってしまった。
「ふむー」

取り残されたちあらは、まだ意識が回復していない生徒の傍らに腰を下ろすと、その頭部にそっと手を添えた。
症状はあまり良くなかったが、ちあらにとっては大したことではなかった。
周囲に人がいないことを確認してから、簡単な治癒の呪文を唱える。
するとすぐさま傷は癒え、脳震盪を起こしていた脳の振動が止まる。
「！」
なので目を覚ます。正常に機能を取り戻したわけであるから、当然である。
彼女の目に映ったのは見覚えのある場所である。しかし、一緒に居たはずの仲間や翼の姿はなく、その代わりに自分をのぞき込む転入生の姿があった。
「どういうこと？」
記憶がうまくつながらない。

「倒れていた。憶えてない？」
転入生があまり抑揚のない声で応えた。
「は？」
「通りかかったら、あなたが倒れていた」
屋上で通りかかるも何もないものだ。
「百花は？　陽菜は？　それに翼はどうしたの？」
だが女生徒はそれよりも転入生以外に誰もいないことが気がかりのようだった。
「ごめん、まだクラスメイトの名前は覚えていない。あなたの仲間は先生を呼びに行っている」
「……」
生徒は納得できないといった目でちあらを睨んだが、しかし目の前の情景は、転入生の言うことの方が整合性があった。
「し、失礼するわ！」
自分を支えてくれているちあらの手を振り払うと、彼女はスタスタと行ってしまった。

「ふむー……」
早足で去って行く生徒の後ろ姿をみつめながら、ちあらはため息にも似た声を上げた。まさかこんなおっとりとしたお嬢様学校でいじめがあるなんて想像もしていなかったからだ。比較的恵まれた子たちが登校しているのではないのか、などとも思う。
そして一つ不安が生まれた。
それは自分が少し目立ちすぎたことだった。
いじめの対象になってしまうかもしれない。

＊　＊　＊

「あ……」
ちあらが教室に戻ると、翼一人だけだった。
翼はぼうっとしながらも、不安そうな表情をして、黙って自分の席に座っていた。
自分の行動が信じられなかったからだ。

一度も暴力など振るったことのない自分が……なぜ激昂(げきこう)し、あのような行動を取ってしまったのか。もちろん怒りの感情は前からあった。けれどそれを表に出せるような性格ではなかった。

どうして……。

ただ、自分の今の気持ちは、戸惑いだけではない事にも気づいていた。自分でも行動を起こそうと思えば起こせる。そう、それは新学期が始まった今日、勇気を出して学校に来られたように。

一方のちあらは翼が教室に一人でいることをチャンスだと思った。なぜなら、ちあらはこの子に近づくためにわざわざ転入してきたのだから。

「あ……」

翼もようやくちあらに気づく。そして気まずく思ったのか、すぐさまカバンを背負って教室から出て行こうとした。

「待って……」

ちあらが呼び止める。

彼女の声はか細いのに、なぜかハッキリと聞こえる。それはさっき同級生への暴行を止めたときもそうだった。ちあらの声は心に届く。

「心配しなくてイイ。あの子はあのあと普通に意識を取り戻したから。それに……」

ここでいったん言葉を切った。ここで翼の反応をちあらは確かめたかったからだ。

ちあらの予想通り、翼はちあらの言葉に興味を持った。続きを知りたそうに、ちあらを凝視する。

「あなたにされたことは、憶えてなかった」

「え？」

「頭を強く打ってしまったからかも」

目の前の転校生はそう言うが、そんな好都合なことってあるんだろうか？

「……」

翼は疑いの眼差しをちあらに向けた。

「でも、本人は憶えてなくても、あなたが暴行したことを見ている生徒はいる」
「あ……」
そうだった。
「もし復讐されるようなことがあったら、わたしが力になる」
「先生に言いつけられたら……」
「いじめられていたことをわたしも証言する」
「……それは」
「いじめられていたことは、隠したい？」
「いじめがひどくなるから……」
「わたしがいる」
ちあらは自信たっぷりに自分の胸を叩いた。
「でもそうしたら、今度は月夜野さんに迷惑が……」
「わたしは強い。大丈夫」
そう頷くちあらを見て、翼は納得するかというとそんなことはなかった。目の前の転入生は自分よりも小さい。腕も細いし、身体も細いし、どこをどう見て説得力が無いのだ。
「正義感が強いのは解ったから……でも、それだけじゃダメだよ」
翼が俯いた。
何か理由がありそうだとちあらは思った。
「ふむー」
ちあらは逡巡したあと、ぽんと何かを思いついたように手を打つと、翼のおへその辺りを指さした。
「？」
翼が首をかしげながらも、釣られてちあらの指先を見つめた。
「そこから絶対に視線を離さないで」
と言い終わるや否や、翼の身体が宙を舞った。
ふわりとした感覚。
アニメやゲームでよく聞く言葉だけれど、実際に体験したのはこれが初めてかもしれない。

身体の中身が浮き出てくるんじゃないかというような変な感覚。身体の中を風が通り抜けていったんじゃないかというような感覚。

それを知覚した途端、廊下側に投げ飛ばされていた。同時に肺というか胸に激痛が走る。打ったのは背中のはずなのに。

「翼は受け身がとれるのか」

翼を投げ飛ばしたちあらは、少し目をパチクリとさせたあと、にっこりと笑った。

「な、何が起きたのかよく解らなかった」

と答える翼だが、身体の体勢はしっかりと横受け身ができていた。

けれど痛かったことに変わり無いので、受け身が本当に取れていたのか翼は懐疑的だ。

「もう一度言う、わたしは強い」

ちあらはそういうと、翼の手を取って引き上げた。

「みたいだね……でもその強さが通用するのかどうかは……あたしには解らないよ」

翼はそれでも俯いて首を左右に振った。

いじめは陰湿なものである。正面切って暴力を振るって来るならば、ちあらはどうにでもなりそうだ。しかし、いじめというのはそういうものではない。

「でも、月夜野さんには助けられたから、素直に礼を言うね。ありがとう」

考えてみればいじめが始まってからと言うもの、クラスメイトに話しかけられることもなかった。話しかけられたときは、いじめられるときだけ。だから事情を知らないとは言え、こうして普通に話しかけてくれることが嬉しいことに翼は気づいた。

「家はどこ？ 一緒の帰れるところまで帰ろう」

さらにちあらはそう言って、翼の手を引っ張った。

＊　＊　＊

吉祥寺駅は翼の通う学校から歩いて二〇分ほどの所にある、最寄り駅とは言いがたい駅である。学校の最寄り駅は三鷹台という駅で、これは学校の正門のほぼ真ん前だ。

吉祥寺まで歩こうと提案したのはちあらだった。

理由を聞くとその方が一緒にいられる時間が長くなるからということだった。なにそれと翼は思ったのだが、誰かと会話できることが嬉しかった翼は素直にちあらの提案を受け入れた。

ちあらの話はおおよそ中学生が話す会話とはかけ離れていた。

どうも家は神社らしい。

神社の周囲には猫がたくさんいて、朝おきたら猫たちに餌をやるところから始まって、境内の掃除、本堂の掃除をする。冬でも汗をかくほど大変らしい。

それから自分の朝食を作るのだとか。

吉祥寺には、生まれて初めて来たから、興奮気味！とか無邪気に笑う。

じゃぁどこか行きたいお店とかあるのか聞いてみると、ちあらは「寄り道はちょっとー……」とシャイなことを言う。

そんなちあらをみて、翼はようやく笑顔を見せるようになった。

「いじめのことは聞かないけど、力になれることがあれば何でも言って欲しい」

ちあらは相変わらずその小さな胸を張って得意気にいう。

「ありがとう」

少し勇気づけられる。でも心配事もある。ちあらが巻き込まれたらそれは自分のせいだ。いじめに加えて、そんな思いまでしたくないと翼は思った。

『四番線、ご注意ください。電車が通過します……』

ホームに上がると、お目当ての四番線は通過だった。

とはいえ中央線はすぐにやってくる。

「翼はどの駅まで乗るの？」
「あたしはお茶の水で乗り換え、月夜野さんは？」
「同じ…！ そこで総武線というのに乗る」
「あたしは千代田線だからお茶の水までは一緒だね」
二人はにっこりと笑い合う。
「あ……」
が、翼の笑顔が一瞬で曇った。
「ん……？」
ちあらが後ろを振り返り、翼の見つめる先を視界に収める。
するとちょうど階段から見覚えのある女生徒がホームへと上がってきたところだった。あの翼が押し倒してしまった、いじめのリーダー格の女生徒だ。
「日下部さんが……どうして吉祥寺駅に……」
翼の表情が恐怖のそれへと変わる。
それを見て、ちあらはあの女生徒が普段は中央線を使っているわけではないと推理した。
ということは翼を追ってきた……？
ちあらは少し身構えたが、女生徒はこちらに意識を向けることもなく、ただホーム際に向かって普通に歩いて行く。
そもそも翼たちに気付いてすらもいないようだ。
そこへ列車がホームに入ってくるのが見えた。
中央特快東京行、通過電車だ。
しかし女生徒の歩みは止まらない。
別に歩きスマホをしているわけでもないのに。
「おかしい…」
ちあらはその女生徒に対して何か負の感情を持っていないか調べようとしたが、時間が足りないことにも気付いた。
「持ってて！」
ちあらは自分のカバンを押し付けるように翼に渡すと、地面を砕きかねない勢いで蹴って一気に女生徒に向かって駆け出した。

「日下部さん！ 気付いて!! それ以上はいけない!!」
しかし、距離がありすぎた。
ちあらの声は通過電車の音でかき消されてしまったのかもしれない。
彼女の俊足を持ってしても女生徒がホームから飛び降りるのには間に合わなかった。
電車の警笛がホーム中に響き渡る。
同時に聞こえるけたたましいブレーキ音。
霧のような血しぶき。
轟音とともに自分のすぐ横を通過する列車。
「くっ……！」
最大加速だったため、ちあらの身体もすぐには止まらない。まだ速度のピークにも達していなかったが、彼女はホームの内側に向かって前受け身をとると、そのままゴロゴロと転がって、自販機にぶつかって止まった。
命は助かっていまい。
ちあらはそれを覚悟すると、再び先頭車両に向かって走った。
なぁに、死体は見慣れている。
それよりも魂を確保して自殺した理由を突き止めねばという思いに頭は切り替わっていた。
事故直後で、まだ駅員も集まりきっていない。
女生徒は絶妙なタイミングで飛び込んだらしく、車両に跳ね飛ばされることなく、完全に車輪に飲まれていたようだった。
しかしいくら待っても魂は飛び出してこなかった。
駅員が集まり、野次馬も集まってくる。
野次馬の仲間と思われたくなかったちあらは、少し現場から離れた。
「……」
が……。
魂は一向に出てこない。
「あ……」

しまった、翼をほったらかしだ。
ちあらが慌てて後ろを振り向くと、ほぼ真後ろに翼が神妙な表情で立っていた。立っていたというか、立ち尽くしていたというか。
「助けられなかった」
ちあらは翼にそう告げたが、その声にあまり感情は入っていなかった。
「カバン……」
翼がちあらの言葉には応えず、預かっていたちあらのカバンを突き出した。
「あ、ありがと……」
翼のその行動は意外にも冷静に見えた。ひょっとしていじめてた生徒が飛び込んだので、明日からいじめられなくてすむとか、そっちの方に頭が働いたんだろうかなどとも思う。
それからちあらは再び事故現場を振り返るが……。
「むぅ……」

魂は出てこなかった。
こうなってしまうと自分のやれることは少ない。魂を探す術などをすればよいのかもしれないが、野次馬が多く集まるこの場所で、誰にも見られずに術をするのは難しい。呪文を唱えたり身振り手振りが必要だったりするからだ。
ちあらは魂の回収をあきらめた。
せめて死体の一部でも手に入れられればとも思って事故現場を人だかりの隙間から覗こうとするが、もらえるわけなどあるわけもなく。
頼りは自分にわずかに降りかかった霧状の血だけである。
「中央線はしばらく動かないから、総武線で帰ろう」
何も手に入らないのなら、こんなところでじっとしていてもしかたがない。ちあらは翼の方に向き直ると、その手を取ろうとした。
「あ……」

翼はちあらにカバンを渡したときの姿勢のまま、立ち尽くしたままだった。
足も震えている。
そして、よく見たら、失禁していた。
まぁ、ムリもない。目の前でクラスメイトが木っ端微塵になったのだから。
けれどもちあらにカバンを渡す気丈さはあった。なんだかアンバランスだなとちあらは思った。
「こっち」
固まっている翼の手を取ると、ちあらは少し強く引っ張ってトイレに向かった。
そのまま個室に連れて行くと、便座に座らせる。
「大丈夫？」
まだ固まった表情のままの翼の目の前で、ちあらは手を振ってみせる。
「う……あ……」
その手の動きに合わせて目は動くものの、表情は変わらない。
「しばらくは夢に出てくるかも……」
女生徒が轢かれた様子をちあらは見ることはなかったが、翼はもろに見てしまったはずだ。車輪に飲み込まれ、身体があり得ない方向に曲がり、粉砕されていく様はＰＴＳＤになりかねない光景だっただろう。
「下着と靴下を買ってくるから、ここで待ってて」
ちあらは他に濡れていないところがないか、翼を観察した。
「靴も……かな」
そう言ってトイレをあとにした。
吉祥寺という街はちあらにとって初めての街である。
地名は何となく知っていたし、いつか遊びに行きたいなとも思っていた。
まさか初めての買い物が、失禁した同級生の替えの下着だとは思ってもみなかったが……。
「買ってきた……けど……」

便座に座っている翼は、さっきちあらが出て行くときとまったく変わっていなかった。
表情も硬直したまま。
「むぅ」
しかたがないので、ちあらは薬局で買ってきたウェットティッシュで翼の足を拭き始めた。脛、ふくらはぎ、太もも。翼の足は細くて引き締まっていて、中身がけっこう詰まってる印象を受けた。
なにかスポーツをやっているんだろうか？
そう思いながら容赦なくパンツも脱がす。
「！」
そこで翼が慌ててスカートをおさえた。
「ん、我に返った？ 続きは自分でして欲しい」
ちあらは新しいウェットティッシュを翼に手渡した。
翼は無言で頷くと、ちあらから受け取る。
「じゃぁ、外で待ってるから」
ちあらは個室を出ようとしたが、とっさに翼がちあらの制服の裾を掴もうとするも、翼の手は宙を掻いた。なぜならちあらに触れることは通常の人間ではできないからだ。
「怖いから……一緒に居て……ください」
空振りした手を差し出したまま、蚊の鳴くような声で翼は懇願した。
「……」
この狭い個室に？
とちあらはあからさまに嫌そうな表情をしたが、翼が鳴きそうな表情をしたので仕方なく頷いた。
「あ、ありがと……」
翼の表情が少しだけ綻ぶ。

＊　＊　＊

二人がトイレから出てきたときには、すでに一時間以上が経過しており、いつの間にか中央線は動き出し

ていた。
一時間もトイレの個室を占有していたら、普段なら駅員に追い出されるところだ。
だが事故のこともあり、二人に注意を払う人はいなかったようだ。
揺られる電車の中で二人はただ黙っていた。
黙っているのはよくないなーとちあらは思っていて、何か会話を捻出しようとしたが、好きな食べ物は何かとか好きなテレビ番組はとかなんかそういう話題しか思い浮かばず……ムリヤリ会話を作り出したみたいで嫌だなと思い、結局押し黙ったままだった。
翼もただ黙っていた。ちあらと違って翼はただの中学生である。しかも春の新学期に登校拒否から一念発起して登校したと思ったら、自分をいじめていた生徒が自殺した。
女子中学生の処理能力ではとてもじゃないが受け止めきれないことが立て続けに起きてしまったのだ。

「ふむー」
会話する内容を考えるのをあきらめたちあらは、もう事故のことを話題にすると決め、翼に振り向きもせずに話し出した。
「自殺した生徒は、何か悩みでもあった？」
「え……」
そんなことを振られるとも思ってなかった翼が、少し驚いてちあらの顔を見る。
「心アタリはない？」
ちあらは真剣な表情で翼に振り向くと見つめ返した。
「……」
あの女生徒が自殺をするような理由……。
二学期～三学期のことを思い出す。思い出したくないという思いを感じながら。
けれど……。
「わからない……です」
翼は首を横に振った。

「別に敬語じゃなくていい。敬語を使われると、わたしも敬語を使わなくちゃいけなくなるから」
ちあらはそう言うと、前に向き直った。
「ただいじめをするほどには、不安を持っていた」
そしてそう付け加えた。
「え、不安？」
翼が驚く。
「いじめをするのは、自分の立場が盤石じゃないと自覚しているとき。自分よりも弱い立場の存在を作ることによって自分を安心させたいからいじめをする」
「そ、そうなんだ？」
「コクリ」
ちあらはゆっくりと頷くと、それはいじめだけに留まらないことを説明した。ＤＶも自分に自信がないばかりに家族に暴力をふるい、家族を拘束し、上位にいようとする。
「だから、自殺した生徒が心になにかを抱えていたことは確かだと思う」
ただそれが死を選ぶほどのことだったのかは……。
「ふ、ふーん、月夜野さん、詳しいんだね……」
「ちあらでいい。わたしもあなたのことを翼と呼んでいるから」
ちあらは翼の方に向き直ると、真っ直ぐ翼に視線を合わせた。
「ち、ちあら……？」
「コク、それでいい」
「ちょ、ちょっと恥ずかしいな……」
「すぐに慣れる」
「あはは、そうだね。うん」
翼が笑った。
少しは緊張が解けたようだった。
ちあらもそれが嬉しくて、笑顔で返した。
「あ、着替えのお代……！」
翼が思い出したように声を上げると、あわててカバ

ンから財布を取り出した。
「レシートある。親に事情を説明すれば、払ってもらえると思う」
「ううん、大丈夫、今あるから」
翼はちあらからレシートを受け取ると、その金額を確認もせずに万札を出してきた。
「え……」
ちあらは少し驚いた。中学生って現金をそんなに持ち歩いているモノだったか……。とはいえ別に高価なものを買ったわけではない。パンツに靴下と靴、それからタオルとウェットティッシュ。
「ふぉ！」
たまたま翼の財布の中身が見えてしまったちあらは、思わず短い声を上げてしまった。一万円札が何枚も入っていたからだ。
さすがお金持ち校の生徒はちがうなー……とちあらは感心してしまった。

自分が中学生だった頃、そもそもお金なんて持ってなかったなどと思う。
「はい、お釣り、いらないから」
「払いすぎ」
返そうとするちあらの手を遮って、翼は首を左右に振った。
「いろいろ迷惑もかけたし」
『お茶の水～、お茶の水～』
などとやっている間に、列車は乗り換え駅に到着してしまった。
「あ、あたしここで乗り換えないと。また明日ね、ちあら。今日はアリガト」
万札を押し付けるようにちあらに渡すと、翼はさっさと電車を降りて行ってしまった。あまりの予想外の出来事にちあらはしばらく固まっていたのだが……。
って！ わたしも乗り換えないといけないんだった!!
と思ってシートから立ち上がったときには時(とき)すでに

遅く、中央線快速電車は直進する総武線とクロスして、神田へと走り始めていた。

＊　＊　＊

結局ちあらはお茶の水の隣の駅、神田で降りてトボトボと家まで歩いて帰った。

ちあらの家は神社である。名前を第六天姫榊（ひさかき）神社といい、ちあらはその神主でもあり巫女でもあり、そして祭神でもある。映画で言うところの監督・脚本・主演を一人でこなすのと同じようなものだ。

この神社は大和武尊（ヤマトタケルノミコト）が創祀したという云われがあるが、それは後付けであろう。第六天は仏教用語であるし、江戸～明治とそれぞれの為政者に合わせた経営がなされただけに過ぎない。

武士の時代であれば仏教寄りに、天皇の時代に入れば神道寄りに。それが処世術というものである。それに今となってはそんなことはちあら自身にはどうでもよいことであった。

ちあらは帰るとすぐに制服を脱いだ。その下から白く透き通るような肌が露出する。一四〇センチしかない身体は細く、その胸は豊満とはほど遠いが、全体としては整った身体をしていた。

彼女は室内着に着替えることもせず、血を浴びたであろう箇所を探す。

スカートも脱ぐ。

スラリと細く白い足にパンツも純白だ。

制服の生地を見つめながら、気になる場所を掌でなぞる。

そこから何かを感じ取ろうとしたが、術なしでは特に感じるものはなかった。

仕方がない。

ちあらは下着姿のまま正座をして、制服を前に置いてから魔の力を見つける術、ネガティブな気配や痕跡

を見つける術を使った。
ふわりとお札が浮いたかと思うと、メラメラと自身を焦がしながら制服を照らす。
照らされた制服にはちょうど血が付いた部分が浮かび上がる。黒い細かな点々だ。
そこに掌を当てて、その血に残る何らかの情報を読み取ろうとした。もし血が呪われていたり、この生徒が極度に負の感情を抱いていれば、それくらいは感じ取れるはずだ。
しかし感じるものは何もなかった。
ああ、でも、当然かなとも思った。思い返せば飛び込む瞬間まで、ちあらはあの女生徒から何も感じることはできなかったからだ。もし、あの女生徒が何かを思い詰め、自殺を考えていたのなら、負の感情を感じ取ることができたからだ。あの生徒がホームに上がってきた段階で、命を絶つほどに精神が負の方向に向いていることに気づけたはずだ。
しかしちあらは気づくことがなかった。
あの生徒が同じ電車に乗るんだと思った時も、ネガティブなことは何も感じなかった。
「つまり、自殺することが当然だった……？」
ちあらは首をかしげながらも、女生徒が飛び込むときの事を思い出してみた。
確かに何のためらいもなく、ごく自然にホームの端へと歩いて行った。
あの女生徒にとって、電車に飛び込むことは特別なものでもなく、なんと言えばいいのか……普段過ごすことと同じことだった。
死ぬことに恐怖すらも感じず、また死への決心があるわけでもなく、平常心のまま、まるで朝起きて朝食を食べて学校に行くのと同じように……。
いつもと同じように、女生徒は電車に飛び込んだ。
現時点での情報では、そういうことになる。
「ふむー」

この事件、一筋縄ではいかなそうだとちあらは感じた。そして自分の能力で解決できるのかも……。

＊　＊　＊

翌日、ちあらはあまり気が進まない中での登校となった。案の定、学校は騒がしかった。やれ警察が来ただのテレビ局が来ただのと生徒たちのざわつきが学校全体に広がっていた。

吉祥寺のそれなりのお嬢様学校だし、世間が注目するのも仕方がないかなどと思う。

朝礼のあと、自殺した生徒に関わる生徒が一人一人呼び出されたりしていた。なんでも昨日は保護者向けの緊急説明会などもあったらしい。

ただ、翼のいじめに関しては、学校側は把握していないようだった。

自殺した女生徒の取り巻きたちは、学校側に何と説明をしたのだろうか？ 翼が暴力を振るったことは見ていたはずだ。翼の方がいじめをしていたと主張されたらそれを覆すのはかなり面倒そうだとちあらは思った。

当然ちあらも呼び出されたが、それは別に心のケアをするものだった。目撃者として女生徒の様子を尋ねたりとか、自殺がどういう状況だったのかとかそういうのを聞かれるわけでもなく、ただ生徒たちが落ち込んだり傷ついたりトラウマになっていないかを医学的・心理学的な角度からサポートするためのものだった。

さすがキリスト教系の学校だななどと思う。

他の生徒と違って、現場に居合わせたちあらと翼は、警察の聴取も受けた。それは飛び込むときの様子を尋ねるもので、学校生活に関しての質問はなかった。

とはいえ、困惑していたのは生徒だけではなく、教師側もであろう。

飛び込んだ生徒はお嬢様で、成績も優秀で、教師たちからも一目置かれていた優等生だったのだ。

人一人が死ぬということは、意外と大事なのだなとちあらは呑気にそんなことを思った。

自殺した生徒と仲の良かった生徒が数人、気分が悪くなり早引けしたらしい。

今日の学校は、全体集会のあと、ＨＲをして終わりであった。

教室内の雰囲気は、なんとも言えない妙な空気に包まれていた。

クラスメイトが亡くなったのだから、もちろん暗い。

が……好奇心旺盛な年頃である。しかもいじめをしていたリーダー格の生徒と言うこともあって、勝手な想像や憶測をしてしまうわけで、先生がいなくなった教室はざわついていた。

ただ具体的に自殺を話題にするのはよくないという雰囲気はあって……。

だから心はざわついているが、全体としては教室は静かだった。

こういう時、ちあらはどうしていいかよく解らなかった。自殺した生徒とは接点があったわけでもなく、思い入れがあったわけでもなく……ただ自殺を防げなかったのは心残りか……くらいな感情だけだった。

自分もずいぶんと薄情な人間になったものだと思う。

人の死に鈍感になったのかも。

「ねぇねぇ！」

などとボーッと考えいたら不意に話しかけられて、ちあらは我に帰った。

声のした方を振り向くと昨日翼を追う前に話していた女生徒の一人だった。名前は確か……えーと。

「……」

ちあらがその子を見上げて名前を言おうとしたけど思い出せずに言葉に詰まっていることを相手は察したのだろう。

「萌葱だよ。由良萌葱！」

少し呆れつつも、別に機嫌は損ねてない元気な声

だった。
「ど、どうしたの？」
ちあらは無表情のまま、萌葱を見上げる。
すると萌葱は少し腰をかがめ、席に座っているちあらに目線を合わせると、声を落として昨日のことを聞いてきた。
「日下部さんが飛び込むところ、見たんでしょ？」
どうやらちあらと翼が現場に居合わせたことはクラスでは知れ渡っているようだった。
「……」
ちあらは少し困惑しながらも、無言で頷いた。
「日下部さん、どんな感じだった？」
「どんな感じ……？」
「なんか思い詰めてたとかー、暗い顔してたとか？」
なんでそんなことを聞きたいのだろうか、とちあらは思った。
「そんなにちゃんとは見てない」
「そっかー……」
萌葱は残念そうにすると、屈(かが)んでいた姿勢を元に戻して、それからなんとなく翼の方も見る。
「翼には聞かない方がいい」
とっさにちあらが口を挟んだ。
「え？」
萌葱がなんでわかったと言わんばかりにちあらに振り返る。
「あの子は轢かれるところを見てしまったから……今はそっとしてあげたほうが……」
「へー、そうなんだ。ふーん！」
萌葱はさらに興味深そうに目を見開いて感心する。
どうやらこの萌葱という生徒は好奇心が旺盛なようだ。当人に悪気はないのだろうが……今、する質問ではないだろうにとちあらは思った。
「結局、日下部さんの噂の真相は解らないままかー」
萌葱は残念そうな顔をすると、またちあらに向き

直って、すこし意味ありげな表情をした。
くっ！ つ、釣られないぞ！
ちあらは心を強くしつつ、とぼけて萌葱を見上げる。
すると萌葱は不意にちあらの手を握ろうとした。
とっさと言うこともあるが、それは外れて萌葱の手がスカる。
「やっぱり」
萌葱が妙に納得したように頷いた。
「何？」
ちあらが不審そうな表情で見返す。
「さっきちあらさんに気付いて貰おうと思って、肩トントンしようとしたんだけど……トントンってできなくてさー」
「……」
「やっぱよけてたんだね」
納得したように萌葱がにっこりと笑った。どうやら萌葱にはちあらが避けたように見えたようだ。

実は普通の人間がちあらに触れるのはとても困難である。彼女は何重もの魔法障壁に守られているため、彼女に触れるにはそれこそ超一流の格闘家や剣道の達人が放つクリーンヒットでなければ触れられないのだ。
だから萌葱はちあらに触れられないことを疑問に思ったようだ。
「急に人に触るのは良くない」
ちあらは首を左右に振る。
「萌(もえ)～！ かえろ～!?」
そこへ別のクラスメイトが萌葱を呼んだ。
「あ、うんー」
萌葱は生返事っぽい声で答えると、ちあらに向き合ってにっこりと笑った。
「じゃ、先に帰るね。またね！」
そう言って手を振って教室から出て行った。
ちあらも軽く手を上げて、萌葱を見送る。
少し疲れた、とちあらは思った。

さて自分も帰ろう、と思いカバンを持つ。それからなんとなく翼の方に目をやろうとすると、翼がもう目の前に来ていた。
「由良さんってマイペースだよね」
そしてすこし笑みをこぼしなら、そんなことを言う。
どうやら萌葱とのやりとりは聞こえていたようだ。
「精神、太い人だと感じた……」
ちあらが小さくため息をつく。
「でもそれが由良さんのすごいところかも」
翼がうらやむような視線を教室から出て行く萌葱の背に向けていた。
「ふむー」
翼は萌葱に対してなにか思う所があるようだとちらは感じた。
「なんか、暇に、なっちゃったね」
それから翼はちあらに向き直って、はにかむ。
昨日の動揺ぶりから、まだショックを受けているだろうと予想していたちあらは、翼が普通に豊かな表情をすることに少し驚いた。
「ん、しようがない」
だがその気持ちは隠して、翼に応じる。
「明日は授業あるのかなぁ……」
「どうかな……」
「せっかく登校するようにがんばってるのに……」
「翼は昨日のことは大丈夫？」
「うん、吹っ切れたって言うか、私なりに日下部さんが飛び込んだ理由をこじつけたっていうのかな……」
「……」
「そう思い込んだら心も軽くなったっていうか……」
「そう……」
どうこじつけたのか興味はあったが、聞くのは気が引けた。
「昨日ちあらが言ってたこと」
「？」

「いじめをするのは、不安があるからだって」
「うん？」
「あたし、日下部さんに暴力を振るっちゃった。どうしてか解らないけど、身体が勝手に行動したって言うか……気がついたら日下部さんを押し倒してた」
「コンクリートに頭をぶつけていたから、アレは少し危なかった」
「そうだったんだ……ちあらが止めてくれたから、大事には至らなかったんだね」
「コク」
と頷くが、大事に至らなかったのは、その後にちあらが治療したからだ。
「それでね、不安を紛らわすために私をいじめてたんだとしたら、私が刃向かってしまったから……日下部さんの不安を大きくしてしまったのかなって」
「翼……」
「何が不安だったのかは解らないけど、日下部さんも苦しんでたのかなって……そう思ったら、日下部さんのことを許せるような気がしたんだ」
翼は胸に手を当てて、そして目を閉じた。
今の感情を確認しているようにも見える。
「あ、でも死んだ人に許す……なんて、偉そうだったかな……」
それから苦笑して、首を振って恥ずかしそうに俯いてしまった。
ちあらはいじめたこともいじめられたこともなかったので、二人の心境を理解することは難しかった。でも翼の「許す」という表現は素直に受け取ろうと思った。いじめをしていた人を許すということは、そう簡単にできることではないと思ったからだ。
二人でしんみりしていると、教室の入り口から女生徒が一人入ってきた。
大股でずんずんとこちらに向かって歩いてくる。ちあらには見覚えのある生徒だったが、名前はわからな

かった。翼は知っているらしく、身構える。
彼女は翼の真ん前まで来ると、キッと睨みつけた。
「人殺し！」
静かな教室に、鋭い言葉が発せられる。
「あんたが、日下部さんを殺したんでしょ！」
そしてさらに翼に詰め寄る。
翼は圧倒されて後ろに後ずさった。それでも何か言わなくちゃいけないと思ったのだろう、口を開くが声にはならなかった。
「あんたが……!!」
相手も激昂していてうまく言葉にならないらしく、言葉に詰まった。
目に涙を浮かべている。
「百花、やめなよ」
いつのまにか別の生徒がやってきて、翼に詰め寄る生徒を止めた。
「……私、許さないから！ 日下部さんに何をしたのか、絶対に突き止めるから！」
百花と呼ばれた生徒はそう言うと、キッと翼を睨みつけると、止めに入った生徒の腕を振り払ってツカツカと教室を出て行ってしまった。
残された生徒もバツが悪そうに後を追っていく。
「……」
翼は何も言い返すことも出来ず、俯いてしまった。
せっかくいじめのことも、そしていじめていた生徒が自殺したことも、自分の中で折り合いをつけて自分なりに納得しかけていたところだったのに……すっかり蒸し返されてしまった。
「いじめをするような人でも愛されてはいる」
ぼそりとちあらがそんなことを言った。
「ちあらも日下部さんの味方をするの？」
ちあらに見放されたような気持ちになって、翼は泣きそうになった。
「自殺したことで、いじめてた生徒たちは被害者に回

ることができた」
「え？」
「リーダーを失ったことで、取り巻きたちは今どうすればいいか迷っているはず」
「どうすればって？」
「翼をいじめ続けるか、いじめからは決別するか、先生を味方につけるか……」
あとはなんだろう……と思う。いじめたことがないので、よく解らない。
「もう関わらないで欲しいのに……」
翼は肩を落とした。
でもそれは無理そうだと、ちあらは思う。
「さっきの生徒は日下部さんの自殺に疑問を抱いている。翼への行動は日下部さんが自殺する理由がないことを意味していると思う」
それはその通りだと翼も思った。
日下部という生徒はこの学校でも一目おかれていたお嬢様だ。多くの取り巻きもいたし、先生たちからの信頼も厚く、非の打ち所のない生徒だった。
そんな生徒が突然自殺したのだ。
理由もなく。
百花と呼ばれたさっきの生徒も日下部の自殺が信じられないのだろう。しかも現場には日下部にいじめられていた生徒が居合わせていたのだ。
翼に何らかのことを想像してしまうのは当然のことなのかもしれない。
「嫌なことがあったら、気を紛らわすのがいい」
ちあらは俯く翼の顔をのぞき込むと、少し得意げな笑みを見せてそう言った。
「それって解決になっていないと思うんだけど……」
俯いたままの翼は、上目遣いでちあらを見る。
そもそも気を紛らわすなんて……今の気分でする気にもならない。
「でも心がネガティブな時に何か考えても、いい答え

は見つからないと思う」
ムリに考えても、余計に心が傷ついてしまうかもしれない。
「……！」
確かにそれはそうだと翼は素直にちあらの提案を受け入れた。
「気を紛らわすこと……」
なんだろうと翼は考えた。
そうやっていじめ以外のことを考えるだけでも、先ほどの暗い気持ちを心の隅っこに追いやれたような気がした。
そうすると俄然、色々なアイデアが湧いてくる。
何か美味しいものを食べること。
洋服を見ること。
単純にどこかに遊びに行きたい。
でも今は……！
「ちあら、ちょっと付き合って！」
翼はちあらの手をとろうとした。
ちあらがそれを受け入れると、翼は何の抵抗も無くちあらの手を握ることが出来た。
翼はちあらを引っ張って校庭へと連れ出す。
春の陽気が二人を出迎えた。そうだ、今は春なのだ。塞ぎ込んだり落ち込んだりするような季節でもないのに、と翼は思い直した。
校庭はとても静かで、誰もいなかった。いつもなら部活などで賑わっているはずなのだが、生徒の自殺があったからだろうか。学校の雰囲気も春らしくないなと感じた。
翼は校庭をすこし懐かしそうに眺めると、ちあらに振り返った。
「あたしね、陸上部員だったんだ。スプリンターの選手で……全国大会にも出る予定だったんだけど……」
そしてちょっと照れ気味でそう言った。
全国大会はいじめと不登校のせいで流れてしまった。

なるほど、翼の引き締まった肉体は陸上部員だったからか、とちあらも納得した。

「だから、走る！ 走って、嫌なこと忘れる!!」

嫌なことを忘れたい。

でもどうすればいいかよく解らない。

そんな翼が導き出した答らしい。

「カバンお願い！」

翼は関節を慣らしながら、持っていたカバンをちあらに預けると、トラックへと駆けていった。

ちあらは陸上競技のことは詳しくないのでよく解らなかったが、翼の走る姿はとても綺麗だと思った。フォームは整っていて無駄な動きがない。自分の走りとずいぶんと違う。

翼が走ることを選んだのは、気を紛らわすとか、嫌なことを忘れるとかそういうものとは少し違っていた。走りに集中することによって、煩わしい思いを全て消し去れるのに近かった。

悩んでいることも、悲しいことも、嫌なことも。

一生懸命走ればそれはどこかに消えてしまう。

もちろん走り終わったら、また思い出してしまうのだろうけど、今は……今だけは全てを忘れたい！

トラックを何周かした翼はちあらの所に戻ってくると、濁りのない笑顔を見せた。

「うん、気持ちよかった」

さっきよりも声がだいぶ溌剌(はつらつ)としている。

「それはよかった」

ちあらが持っていたミニタオルを渡そうとしたが、翼は汗一つかいていなかった。トラックをちょっと回るくらい、翼にとっては何てことないようだ。息もそんなに荒くなっていない。

代謝機能が優れているのだなと、ちあらは思った。

「ねぇ、遊んで帰ろ？」

それからカバンを受け取りながらそんなことを言う。

「遊ぶ？」

ちあらは首をかしげた。
「吉祥寺かな……渋谷かな……渋谷がイイかな……」
「え？」
「ちあら、そういう所で遊んだことなさそうだよね」
「ない……寄り道はよくないと思う」
「真面目ー。でも気を紛らわせばいいって言ったのはちあらだから」
「そうだけど……」
走るだけじゃダメだったのかな、と思う。
「走ったら、お腹も空いてきたし」
「せめて家に帰ってから……」
「今すぐ食べたい！」
翼はまたちあらの手を取って、グイグイと歩き出す。
なんだかいじめられっ子というのが嘘みたいな積極性だ。
ちあらは気は乗らないものの、今まで見た翼の中では一番機嫌がよさそうだったので、今日は翼に任せることに決めた。ここで変に否定したりしたら翼がまた塞ぎ込んでしまうかもしれない。
校門を出ると駅へと延びる一本道が続く。
その一本道は駅で踏切になっていて、駅の向こう側へと伸びている。
駅の手前には神田川（かんだがわ）が横たわっていて、川添いの小径はまだ桜が咲いていた。
うららうらと柔らかい日差しの中で、桜の花びらが舞っている。
のんびりした空気だなーとちあらは思った。
自殺のことがなければ、とてもまったりとした学園生活が送れたのに……とか思う。
不意に踏み切りが鳴り始めた。でも駅への入り口は踏切を渡らなくても大丈夫だったはず。
ふと、後ろから誰かが駆けてくる足音がした。
こちらに意識が向いていることが解ったので何となく振り返ると、足音の主は百花だった。その表情は険

しかった。何事もなければいいけど、とちあらは心の中で思う。だが案の定、百花は二人を追い抜き際に振り返る。

「人殺し！」

そして翼に投げつけるようにそう言うと、駆けて行ってしまった。

あまりのことにちあらは呆れてしまう。

翼もせっかく気分が紛れてきていたところだったのに、蒸し返されてまた心がざわついてしまったが、ここで塞ぎ込んだらいけないと心を奮い立たせた。そして自分は日下部さんのことを憎んでもいないし、恨んでもいないことを伝えようと思った。

「まって……！」

翼が百花を追いかけ始める。

「あたしの話も聞いて……！」

駆けていく翼のあとをちあらは追わなかった。翼自身が百花に思いを伝えることによって、いじめを受ける状況から抜け出す機会になるかもしれないと思ったからだ。この場は干渉すまいと決めたのだ。

しかしこの判断が間違っていたことを、ちあらはこのあと痛感することになる。

翼は全国大会に出られるほどの俊足の持ち主である。だからあらはすぐに百花に追いつくと思ったのだ。だが、翼はちあらの予想よりもずいぶんと手前で立ち止まった。なんで立ち止まったのか、最初ちあらは解らなかった。ただ百花に追いついたから止まったわけではないというのは、すぐにわかった。

「え……えええ？」

その次の光景に、ちあらは驚いて目を見開いた。

百花はそのまま踏切の中に入ってしまったのだ。

ごく自然に。

そこに入るのが当たり前のように。

あ、あれ？ 踏切って、鳴ってなかったっけ？ っていうか遮断機下りてるし……。

なんてことを思った瞬間、百花の身体は渋谷行きの急行列車に飲み込まれていった。

目の前でリアルタイムに進んで行く惨劇は、様々な音がしたはずだ。警笛、ブレーキ、ぶつかる音、目撃者たちの悲鳴やざわめき……だが、ちあらには何も聞こえなかった。

ただ目を見開いて、その光景を、ただ、ただ、見ているしかなかった。

あまりの予想外の出来事に、ちあらは何も出来ずその場で立ち尽くしていた。